

「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行

第4回フォーラム研究会

逐語録

(木村) それでは、第4回のフォーラム研究会を始めたいと思います。

まずは資料確認です。まず議事次第です。F4-0 でお願います。次が、第3回フォーラム研究会の議事録案です (F4-1)。反省会メモが F4-2 です。第3回フォーラムの時間配分結果が F4-3。第3回フォーラムに関するアンケート (自由回答) が F4-4。第4回フォーラムスケジュール表案が F4-5 です。次に、A3の資料が3枚あると思いますが、F4-6-1 から F4-6-3 でお願います。第5回フォーラムスケジュール表が F4-7。最後に、フォーラム終了時のアンケート案が F4-8 になります。以上ですけれども、よろしいでしょうか。

それでは、早速議事次第にしたがって進めていきたいと思います。今日は第4回の研究会ということで、13時半から16時半の3時間を予定しています。

議事は、議事録確認から始まって、第3回フォーラム反省。第4回フォーラムについて。第5回フォーラムについても少し話し合いたいと思います。最後に、フォーラム終了時のアンケートについてということで、土田先生から紹介があった後、ディスカッションさせていただければと思います。

0. 議事録確認

(木村) まず、議事録確認です。F4-1 ですが、こちらは先日開催案内とともにメールを差し上げていますので、何かお気づきの点があれば言っていただければと思います。

第3回研究会では、第3回フォーラムのテーマに関して、いろいろ議論していただいて、なんとか決まったということです。

あとは、第4回フォーラムの提案についても少し議論いただいて、第4回の設計にも反映されていると。

最後に、フォーラム終了時のアンケートについて少し議論があったということになります。何かお気づきの点がありましたらご連絡をいただければと思います。

1. 第3回フォーラムの反省

(木村) それでは、次の議題にいきたいと思います。第3回フォーラムの反省ということで、まず、第3回フォーラム終了後に行なった反省会のメモを作っていましたので、読みあげたいと思います。

全体としては、時間が延びてしまったということ。約10分のオーバー。開会挨拶・自己紹介は20分かかるとい話がありましたけれども、録音データを基にすると15分だったということです。第3回は、少し遅れてきた方もいて、5分くらい遅れて始めたのですね。それで(自己紹介の)終了が13時20分になりましたけれども、実際の時間は15分だったということです。あとは、場作りの大切さが分かった。時間管理、プログラムの安定形を求めていけたら。3回ではつまらない、来年度も5回やりたいという意見が聞かれました。あとは、グループワークの5分の余裕とは別に、フォーラム全体で10分くらいの余裕を持ったほうがいいかもしれない、という話がありました。

サブファシリテーターからは、最後に介入してしまったという話。ファシリテーターの力量でサブファシリテーターの振る舞いが変わる。ファシリテーターがすぎてしまうことがある。これはメンバー依存ですね、という話。一方では、あまり介入しなかった。模造紙を最後の最後までまとめていたという話。一参加者になってしまったというような話がありました。

グループワークの反省点としては、議論が2か所に分裂している瞬間があったということ。これは反省会当日はB班からありましたけれども、録音データからすると、C班にもそういうときがあったということでした。あとは、A班は良かったということで、意見の連鎖反応が見られたと。情報のやり取りと意見のやり取りの違いで、盛り上がりには違いがあるのではないか。それから、ファシリテーターの意見の引き出しぶりにもよるのでは、という話がありました。あとは、前回のテーマは良いテーマだったと思うということです。

参加者に関しては、参加者の選定方法に不信感があった、という参加者がいたということ。あとは、ファシリテーターに選ばれた人が重なってきているということです。ファシリテーターじゃない人が、ファシリテーターをフォローできるかどうか。ファシリテーターが仕切り過ぎないように、そこは注意する必要がある。サブファシリテーターが付箋を書いて、参加者に確認するのが良いということですね。それが参加者に安心感を与えたという話。そして、参加者全体のスキルが上がっているという話です。

裏面は、フォーラム終了時のアンケートの話ということで、どういうものをアンケートに入れるかということが話し合われたということです。これはまた、必要があれば、最後の議題のときに再確認していただければと思います。

補足資料として、時間配分結果(F4-3)ですけれども、どんな感じで時間が進められていたかを、録音データの時刻を基にまとめてもらっていますので、見ていただければと思

います。

前回、計画と大幅にずれているのは、「前回までの振り返り・グループワークの進め方」のところですか。ここは私の担当だったのですが、15分の予定が、実際には説明が22分、質疑が9分かかっているということでした。振り返りまでに時間がかかりすぎたのと、あとはブレーストーミングの確認、グループワークの進め方で各5分かかっていると。ブレーストーミングは私はちゃっちゃと言ったつもりだったのですが、あまりそうでもなかった、5分もかかっていたのですね。

前回は、第2回を欠席されていた方にもしっかり分かっていたらいいというのがある、少し長めに取ったということはある。あとは、質疑が9分かかっていますけれども、悪くない質疑だったのかなと。あそこでしっかりやることによって、その後のグループワークはしっかり回すことができたのかなと思っています。質疑はある意味仕方ないのですけれども、少しこの辺は工夫が必要かなと思います。

グループワークなどは、目安時間に対して、うまく回していただけていると思います。

あとは、最後の全体共有が少し長引いたと。

あとは、次回のテーマも、質疑があったので長引いていますけれども、まあこんなものかなと思います。

定量的なところからすると、こんな感じで遅れたということです。こういうことも起こってしまうので、そこはフォローしないとイケないかなと思います。

次は、フォーラムに関するアンケート（F4-4）を見ていただければと思います。ざっと読んでみて、そんなに悪いことは特に書いていないと私は思いましたけれども。

選出の方法について不信感を持っているというような話が出てきています。でも、今更くどくど説明しても、仕方ないかなと思います。

（土田） そうですね。

（木村） 一応、今回も選出方法を軽く話したつもりではあったのですが、次年度は、その辺りもしっかり話すことと。その前に、しっかりと参加者を集めるような、なるべく見た目からして公平になるような条件を整えることのほうが大切かなと思います。この件に関しては、今回のフォーラムの中でどうこうする気は、私は特にありません。

あとは、時間が少し足りませんでした、やり方が複雑でしたという話も出ていますけれども、全体としてはそんなにはおかしくなかったかなと思っています。

ということで、前回について、何かお気づきの点があれば。

—— Q8に、遅く来るとファシリテーターになってしまうのではないかと、というようなコメントがあるので、これはどういうことですか？

(木村) これは、くじを引くときに中を見ている可能性があるということです。中を見て、ファシリテーターではないものを取っているのかもしれない。

—— 見えなくなっています。

(木村) そうすると、単なる運？ 透けて見えていたりしないのですか？

—— 半分に折っていますし。広げないと見えないはずですよ。

(木村) 透けて見えているんじゃないですか？ 印刷が裏から見えているんじゃないですか？

—— でも、こういう感じで取っているのだから、中を選んでいることはないと思うんですけど。

(木村) では、中を見て取っているのか、そういうことではないのですか。そうすると、単に残っていただけですね。

つまり、ギャンブラーの過ちとかでもよくある、ヒューリスティクス・バイアスですね。ランダムというのは、必ずしも、全員に均等に当たるということではないので。こうやって偏るといえるのは、逆にランダム性なのですね。だから、この人がヒューリスティクス・バイアスにかかっているよという話です。

方法論に問題がなければ、特に気にする必要はないと思います。

—— はい。中を見ないでくださいって、声をかけましょうか？

(木村) いや、そんな人がいなければ、いいです。

結構偏りはあるみたいですね。まだ当たっていない人が 3 人くらいいて、でも、当たっている人は 2 回以上当たっていると。まあ、でも 3 回程度ですからね。

—— Q2 で、「上のことから発散する傾向があったり、不満の残る人がいるのでは」というのは、どういう意味ですか？

(土田) 「上のこと」というのは、Q1 に書いてあることです。

(木村) どこと対応するかは見えなくしているのだから。

たぶん、多様な方向性から意見が出る、というような話だと思います。だから発散するという話じゃないかな、と思いますけど。

—— サクラについては弁解しないということですか？

(土田) 難しいところですね。我々が指名して、参加者になってくださいと言っている人がいたと。カミングアウトしている人がいたと書いてありますから。

—— そう聞こえてしまったということですよ。

(土田) いや、本人が言ったんだと思います。

—— あ、言ったのは確かだと思いますけれども、指定されて頼まれてなったというのは、必ずしも事実通りではないですよ。

(木村) ではないです。こういう応募があるので、応募してもらって、こちらでも選定しますけれども、ということをちゃんとやっているのです。

—— そうですよ。ピンポイントでお願いしたわけではなくて。後からだけど、通常の手順を踏んだ結果、選ばれたわけですよ。

(木村) そうです。通常の手順を踏んでやっているということです。ピンポイントで決めているわけではないので。

—— なのですけどね。

(土田) 少なくとも、アンケート調査をやって、ある一定の反応をする人を選んだというわけではないので。

あとは、ひょっとすると、こういう発言をしてくださいね、というところまで我々から指示されていると誤解しているのであれば、その誤解は解いておいたほうがいいかもしれない。

(木村) いや、そこまでやるのはおかしいと思います。

—— 言わなくてもいいと思います。

(木村) 選択方法については、最初に言っているのです。なるべく公正になるように、世論調査と同じになるようにチョイスしていますと言っているのです。その範囲内のことですし。こんなことで弁解するのは、自信のなさの表れになって、何か逆に、後ろやましいところがあると思われると思うのです。

(土田) それは真っ当な考え方だと思います。

ひとつには、自分と同じような考えをする人が周りに見当たらないということに対して、不自然さを感じられたのだと思います。

(木村) これに関しては、今更このタイミングで言っても仕方がない話なので、次年度への課題に繰り越したと思います。

—— はい。あまり弁解すると、後ろめたいところがあるんだな、と思われるところは確かにあるので、そういう意味で、あまり言わないという方針も確かにあると思います。

(土田) 首都圏の方は、とても楽しいとか、だんだんわくわくしてきたというような方がいるのですが、同じような反応が学会員にあまり見れないですね。学会員参加者はアンケートにもあまり答えていないのか。思うところはあると思うのですよ。ところが、あまり、このアンケートに本音を書いてくれないのかなという感じがします。

—— わくわくしないのが本音なのでは？

(土田) かもしれません。

—— 学会員の方たちの感想を見ると、議論がうまくいくとか、手順がうまくいくとか、そういうことばかり考えているみたいですね。コミュニケーションのことは考えていないのかな、と思います。

(土田) やはり、自分が変わるという観点は、学会員の方にはまだないみたいな印象ですね。

(木村) ないということはないと思いますけど。少しずつ変わっていますとか、気づきがありますという話はあるので、ないとは言わないですけど、少ない。

—— それは大事な傾向なのかもしれないですね。

市民の方は、毎回新しいこと、まったく知らなかったことを知れて、本当に面白いとか、

自分でももっと勉強したくなったとか、いろいろなことをおっしゃる方も増えてきている。専門家の方にとっては、そういうわくわく感はないけれども、いろいろな方とざっくばらんに話して、オープンマインドになることの心地よさみたいなのをどこかで感じてくださればよいなど。その辺りを期待しているということですよ。

あと、サクラの話なのですが、「市民は原子力に厳しい意見を話すものだ」と思い込んでいるのでは？ 市民もいろいろな意見があって、専門家にもいろいろな意見がある、その多様性に早く気づいてくれるといいなという感じがするのです。

(木村) 本当は、そういう多様性があるということに気づいて、それをそのまま受け入れればよいよね、というところまで行ってほしいのですけどね。

—— 「サクラだから肯定的な発言をしている」と思い込んでいるのかもしれないけれども、そうではなくて、同じ市民でも多様な人がいるということに気づいてもらいたいですよね。そこをどうやったら、うーん、情報を提供というか。

(木村) それをこちらからやるのは、今の段階では無理ですね。だから、ここを気づいてもらうためには、本当は、もっと公平な枠組みとして最初からありますって見えるように作る必要があると思うのです。

—— 分かりました。この件に関しては、最初のボタンのかけ違いとか、ちょっとした誤解が増幅される典型例だと思うので、今回の研究の考察の中では、やはりこういう入り口のボタンのかけ違いのないような公平感がすごく大事だという話ですよ。

(木村) そうですね。そこがないといけない。そして、もしかけ違えても、取り返しがつくかどうか、あと2回で見ていきたいと思います。

別に、自分の意見を変える必要はないはずなのです。他の人の意見を尊重してくれるようになれば、それでもう、私たちのプロジェクトの目的としてはいいはずなので。

例えば、反対派だけの集会を作りますとか、それは全然公正じゃないわけです。でも、反対派の人は、反対派の人たちをたくさん入れるほうが、公平感が増すと思っているわけです。

社会学者でそういうことを言う人すらいるくらいですから。公平感を増すためには反対派を入れればよいと言う人だっていますからね。でも、全然そういうことじゃないはずなのです。

—— 自然に抽出したら、どちらかにかたまっても不思議じゃないというのが公平ですよ。賛成の人が2人、反対の人が2人、真ん中の人2人って、偶然になるのはとても大

変なことですよね。だから、何が公平かっていうのは、

(木村) 基準がちゃんとあって、そこに従うように分布させているところに、ある意味ではひとつの根拠を持ってやっているの。そこに関して、その根拠がおかしいというのは、もうこれ以上弁解しても仕方がないと思います。

(土田) 我々が厳密にできなかつたところに反省はあるのだけれども、対象者を選ぶときに、非常に機械的に、もうロジックでやっているんだということを示せば、それでいいと思うのですよ。

(木村) そうですよ。その説明が少なかったのですよね。あまり説明していない。全体に対してこうなるように選ばれています、としか言っていないのです。どういうプロセスでやったかとか、それがなくて。次年度は、やはりそこもしっかりやらないといけないのかなという反省はしなければいけない。

まあ、第5回のテーマの中に、そういうことが少し含まれるように設定するのはありかとは思いますが、あまりそれを露骨にやるのも本意ではないというか。

(土田) せいぜいやるとすれば、世間ではどう考えられているのでしょうか、という形で、意見分布を推定させるみたいな話し合いをテーマに選べば、と思いますけど。ただ、限られた時間でそこまでやるかどうか。

(木村) それは面白いアイデアですね。

—— ホームページにきちんとした見解を掲示するという考え方もある。

—— 興味を持ってホームページを見たときに、ちゃんと理解できるような説明は必要ですよ。

(土田) それは大事かもしれない。

—— 私が気にしているのは、非常にこだわりをもった記者が取材しようとしているので、偏った人にアプローチをして話を聞き出す可能性も高いような気がしているのです。だとしたら、ホームページできちんと見解を掲示しておいたほうがいいかもしれない。

(木村) 基本的には、個人にはアタックできないようにブロックできるので。

—— アプローチできないはずでしょう。

(土田) できないはずですけど、でも、シンポジウムが公開であるでしょう。

(木村) はい。だけど、参加者は呼ばないですから。

(土田) それから、このアンケートをどうしますか？

(木村) これは、このままは出さないです。加工しますから。

でも、中でこういうことがあったというのは、当然報告書に書かないといけないことです。

—— でも、誤解だと思えますけれども、このような誤解があったのは、誤解を与えるだけの理由があったわけですね。だから、そこを私たちはきちんと受け止めて、反省して、来年度にはそこを改良しますということは、報告書なりホームページ上に載っていればいいわけですね。

だけど、それに対して弁解がましいことをすると、ますます誤解を生むような形になると。

(木村) ええ。今年度が最後のフォーラムではないので、こうやって課題が出てくるほうが、むしろ、次につながるし、来年度やる価値も出てくるかなと思います。

今日のこの議論は、そういう意味で、しっかりと受け止めて。次年度は、調査の中だけで応募者が10名以上来てくれるように。しかもある程度の分布を持って。

ただ、今回思ったのは、「どちらともいえない」「原発は廃止すべき」の層で組んだとしても、それほど反対側に偏らないのではないかと。冷静な人が多いなと思いました。

(土田) どんな調査をやっても、原子力反対だし、不安なのですよ。ところが、なぜ自民党が勝てるか。聞かれたら反対と答えるけど、実際はそれほど深刻に考えていない。

(木村) だから、今回の例を受けると、ちゃんと人数さえ集まれば、偏る分布になったとしても、普通に回せる可能性というか、それくらいの自信は運営側につきつつあるような気がするのですけどね。

(土田) まさにその通りだと思います。つまり、サイレントマジョリティーは、話せばまともに話せるのですよ。中には話しても話せない人が確かにいるのだけれども。大部分の人は、意見表明を求めれば反対だし、やめたほうがいいと言うけど、話しましょうとい

ったらまともに話せると思います。

(木村) かといって、原則としての全体のバランスを、積極的に崩すことはしません。

プロセス公平性を考えたらどちらが有利なのかは、次年度までにしっかり議論して、例えば 12、3 人来たら、その中からしっかり選ぶとか、そういう手を組んだほうがいいかもしれない。

(土田) ちょっと専門的な話になりますけど、調査的に言うと、どうにかして、議論のできる人とできない人を見分けるような質問項目が作れないかなと思っているのです。

(木村) それは厳しくないですか？ それを目安に選ぶなんて、言えないですよね。

(土田) いや、それで選ばないにしても、一応分布として見ておいて。

—— そのほうが、こういうフォーラムをやったときの成功確率が高いでしょうね。議論に参加できる、要するに、コミュニケーション能力を見たほうが。

(木村) ただ、コミュニケーション能力と言ったときに、もっと深い意味があるのですよね。口先がうまいとか、会話がうまいではなくて。ちゃんと相手の話を聞いて、言われていることの大筋を理解した上で、自分のことも抑えながらも、ちゃんと自分の意見は言えるとか。そういうコミュニケーションの能力が必要です。

口先はうまくても、結局ずっと話し合っていくと、この人は全然意図を分かってくれないね、という人もいるわけで。口がうまく回らなくても、やっていることはゆっくりでも、じっくり話せば良い場になってきたねっていう人もいるし。

—— それが、アンケートの、気づかされた、成長したという反応に表れているような気がします。元々そういう能力がなくても、フォーラムを通じてその能力が高くなっているんじゃないですか。

(木村) そんな気はします。

(土田) 心理学で言うと不協和耐性というのですが、曖昧なことにどれくらい耐えられるか。自分の意見と整合しないようなことを言われて、どれくらい耐えられるか。そういう個人特性があるのですよ。それが高い人が、議論になるような気がしますね。

—— なるほど。

(木村) 専門家はすごい難しいじゃないですか、そうしたら。

——それがフォーラムの目的のひとつでもあるのですよね。プロセスを見ていくという。

(木村) そうです。曖昧耐性は、確かにフォーラムに出てくるには、大切な素養かもしれない。

——第3回を終えて、メンバーの方たちのコミュニケーションのパターンが分かってきたと思うのです。やはり、ご自分の話したいことはたくさんあって。でも、結局ご本人が思いを吐き出しただけで、他の方の意見をちゃんと聞いているのかなと思うところがあるのですね。最初から自分の意見に固執している部分があって。何回議論を重ねても変わらない。班が変わっても言っていることは全然変わらない、みたいなどころがあるので。それはそれでもいいのかなという感じですけども、サブとして流れを見てみると、難しいなと思います。

(木村) はい。話は尽きないのですが、今日は議題も盛りだくさんなので、そろそろ進みたいと思いますけれども。

——よろしいですか。元気ネットのメンバーがサブファシリテーターをやらせていただいている、サブファシリテーターが何を期待されているのかという辺りを、やはり考えていかなければいけないと思っています。

第1回は、ある程度のところまで話がいけないと話が深まらないので、ある程度のところまではサブファシリテーターとして盛り上げたほうがいいのではないかという設定でやった。そのときに、少しサブファシリテーターが力を出しすぎたんじゃないかという話がありました。

第3回は、参加者が自分たちの力でどこまで話し合いができるかを見たいから、サブファシリテーターが話すのは最低限にして、内容には関わらないでやるということを徹底してやったわけですね。

その中で、前回、班によってずいぶん話の内容や進行に違いが出てきたと。それは研究だからそれでいいということですが、反省会するときにももうちょっと動いたほうがいいんじゃないかというご指摘があったり。やはり、ある程度、何を期待されているのか、きちんとしたほうがいいかなと思ったのですね。

ただ、第4回は内容がかなり違ってきますよね。だから、ファシリテーションのやり方はだいぶ変わってくるかなとは思っています。

ちょっとそれだけ、第3回が終わって、課題として感じたものですから。

(木村) 私としては、第1回はサブファシリテーターに対しての意見もありましたけど、第2回、第3回は出ていないので、結局、そのくらいが公正なやり方なのかなと思います。

まあ、話が分散したり、B班は違う話題に走っていたねというのがありますけど、あれはもう仕方がないかなと思うのですね。

—— では第2回、第3回くらいがいいと。特に第3回はかなり抑えて、結果的には、メンバーの揃い方とかによってかなり雰囲気が変わってきたけど、それが今回の研究のひとつの流れだということで、この流れでいいということですね？

(木村) はい。私としては、場の公正性をどう作るかというところを考えていったら、今くらいに抑えてもらうのがいいかなと思います。

でも、サブファシリテーターがいないと、はっきり言って、全然動かなくなってしまうので、いていただかないととても困る、という感じです。

—— いることに意義はあるけれども、その意義を参加者が感じないようにやる、ということですね？

(木村) そういことです。参加者がそれを感じてしまうと、不正だと思う人が出てきてしまう。なんか、ややこしいのですが、そんな感じなのかなって。

—— 分かりました。お手伝いしていることが、一応役には立っていると。

(木村) とても大切です。逆に、負担を強いているなと思っているので。精神的負担まで強いているなと思っています。

—— 皆真面目なので、反省会をすると、真剣にいろいろ考えるのですね。代表で、今、伺いました。

(木村) 分かりました。

—— そういう意味では、第1回で少し前面に出ていただいて、第3回は引かれたので、その手綱さばきがよかったのではないですか。それがアンケートの結果に出ていて、グループワークがうまく行ってよかったというご意見もあるし。今のところ、手綱さばきは非常にうまくいっているような気がします。

(木村) 第1回はかなり仕切っていただいたじゃないですか。それはそれで私もいいと思っていますのです。ただ、あれを、今回のルールですというふうにしてあげればよかったと思っています。それは反省ですね。

今日はまだ初めてだし、今日の目的は皆の意見をとりあえずいっぱい聞くことです。なので、今日は、一応ファシリテーターを皆様にやっていただきますが、なるべく意見を回すだけに徹しますけれども、こちらで用意したサブファシリテーターに従って意見を言ってくださいと。次回からは、皆さんだけで回してください、とか。最初にそうやって宣言してしまう。そういうやり方で、今日のルールを明確にしておけば、第1回も、もっとそういう不満が抑えられたのかなと思います。

—— 確かに、初回は参加者も皆初めてなので、ある程度仕切るのは結果的には良かったと思います。それを、1回目はそうするってはっきり言えば、

(木村) ええ。言わなかったのです。

—— 確かに、木村先生が言うように、そのほうが良かったかもしれませんね。

—— そうですね。結果的に言えばそうですね。

(木村) その反省があったので、第2回からは青い紙、ピンクの紙を用意したのです。そうしたら、それが分かりやすかったという話でしたので。これはいいのかなと。

だから、次年度は、最初からそういうふうにする方がいいかなと。

—— 今の総括していただいた流れで理解しました。ありがとうございます。

(木村) ありがとうございます。他はよろしいですか。

2. 第4回フォーラムについて

(木村) そうしたら、第4回フォーラムの議論にいきたいと思います。

今日いろいろお話を聞いてからにしようと思って、私が考えているスケジュール案をまずご紹介します。時間との戦いが大きくて、本当にどうしようかなと悩んでいるところです。

13時に始まって、イントロダクションでは、やはり最初にいつも通り自己紹介をする必要があるかなと。このときに、2、3分で調べたことを話してもらおうという話があったと

思いますけれども、1時間かかってしまうのですよね。どうしようかなと悩んで、このバージョンではどうしているかという、いつも通り、この2週間であったことを話してもらうことにしています。前回遅刻の話もあったので、20分取っていますけれども、別に必要ないということだったら、15分にします。

前回までの振り返りとこの後の進め方も、20分取っています。というのは、第3回までと大きく異なるやり方になるので、ここでしっかり、今日1日をどう進めるか話しておかないと分からないかなと思ったので、少し長めの時間を取っています。

次がグループワークなのですけれども、60分取ろうと思っています。右の備考のところを読みますけれども、4グループで、1グループあたり4人、もしくは5人。1人は欠席の連絡が来ているので、18人なのですが、最初3グループで組んだのですけれども、4グループかなという感じになっています。そうすると、1人あたりの持ち時間が12分、もしくは15分です。じっくりそのグループの中で話してもらおうと思いました。

原則、最初に5分間、自分の持ってきた資料を話して、それに対して2分で各自（発表者以外）が意見を書いて、3分間で各自（発表者以外）が意見を表明する。で、残り時間はディスカッションになります。

やはりこの前、質問の答えを書くのも1分じゃ足りないという話があったので。今回は意見になるので、2分でも足りないかもしれないです。

一通り意見をもらってから、2、3分のディスカッションができればいいかなという感じで組んでいます。

模造紙は人数で分割して、それぞれの領域に各自の名前を書いて、そのスペースにグループで出た意見を貼っていくスタイルにします。その後、ディスカッションで出た意見はサブファシリテーターに書いてもらって、貼っていくと。

ファシリテーターに関しては、持ち回りで、意見を回す役というのがいいかなと思っています。今回は、くじ引きでファシリテーターを決めるのではなくて、この人が話しているときは、次に話す人がファシリテーターです、っていう感じ。そういう感じで回っていたほうがいいかなと思っています。グループワークを全部1人でというのは大変かなと思っています。

サブファシリテーターは、そういう意味で時間管理もやりながら、あとは記録をやる。でも、あまり動く必要がない可能性もある。総合ファシリテーターは15分前にアナウンス。そういう感じで、とりあえず、1人15分くらいの持ち時間でじっくりと自分の意見を他の人に話して、それに対して意見をもらうというような時間を取ろうかなと思って、作っています。

—— これは12分から15分の間で、貼っていくのですか？

（木村） そうです。

—— 話しながら、意見を聞きながら、質問しながら貼っていくのですか？

(木村) 質問はしないです。

各自（発表者以外）が意見を 2 分で書いて。それを貼りながら、各自がその意見を言っていくのです。

—— 書いたものを、例えば、「木村」のスペースの中に貼ればいいだけですよね。

(木村) そうです。

後で出てきますけど、全員に意見を話すときにどうするかというと、自分の資料の 1 ページ目を見ながら自分の意見を話す。これが 2 分です。その後、模造紙を見ながら、グループでどんな意見が聞けたかを話す。これが 1 分です。計 3 分で、参加者全員に話してもらいますから、グループワークはそのための意見出しです。

結局、グルーピングとかをしないので。

—— 単純に貼っていくわけですね。

—— サブファシリテーターは、ディスカッションの部分で出た意見を書きとって、貼っておけばいいのですね。

(木村) そうです。貼るということです。

—— 5分話して、2分で書いて、3分で発表してもらう。そういうことですね。

(木村) はい。そのグループ内で、です。

—— 意見表明の 3 分は、1 人ではなくて、グループ全体（発表者以外全員）で 3 分ということですね？

(木村) はい。そこを回すのが 3 分です。その後、次の人の持ち時間になるまで、フリーのディスカッションをして。その部分はサブファシリテーターがぱっと書いて貼っていく。

—— 原則 5 分話してというのは、1 人が 5 分ではなくて？

(木村) 1人5分です。1人あたり、持ち時間が12分か、15分。その間の時間配分を書いています。

—— 神崎さんから私までの4人がグループとすれば、私が5分話して、(他の人たちが)2分で書いて、(他の人たちが)3分で意見表明して、その後フリーディスカッションをする。それで合わせて15分くらい。15分かける4人で、60分。

—— 分かりました。

—— 5分話すときは、どういう形で話すのですか？

(木村) それは資料がありますから、それを使って、どうしてこう書いたのかとか、そういうことを話してもらおうと。

—— 5分話さない人も当然出てきますよね。

(木村) 出てきます。ただ、5分じゃ収まらない人も出てくる。だから、1人あたりの持ち時間を決めておいて、目安として5分、2分、3分という形です。

—— そのとき、ファシリテーターがぐるぐる回るわけですね。

(木村) そうです。

A氏の持ち時間 (12分)	B氏の持ち時間 (12分)	C氏の持ち時間 (12分)	D氏の持ち時間 (12分)	E氏の持ち時間 (12分)

A氏の発表 (5分)		意見の記入 (2分)	意見の表明 (3分)	ディスカッション (残り時間)

グループワークの進め方 (5人の場合)

※ファシリテーターは、A氏の持ち時間はB氏、B氏の持ち時間はC氏、などの形で持ち回る。

—— (資料は) あらかじめ送ってもらうんでしたっけ？

(木村) あらかじめ送ってもらいます。7月1日に投函してくれと言っています。

—— そうすると、それを小冊子にして配るわけですね。

(木村) そういうことです。

—— 木村先生、全体の構成を先に話していただいてから詳細に入りませんか。

—— (途中で質問して) すみませんでした。

(木村) その後、14時40分から休憩。10分間取っています。

全体共有は60分取っています。1人3分、20人で60分なので、これで1時間ですね。14時50分から15時50分まで。ここは、1人3分といっても、収まらない可能性があるので、10分間余裕を持っています。

ですから、次は16時からで、5分間で次回のテーマを伝える。次回はまとめなので、どういうテーマにするかは、次の議題でお話したいと思います。

16時5分からはいつもの通り、アンケートを記入して、最後に一言ずつ話して、フォーラム終了、という形を全体の枠組みとして考えているということですね。

肝の部分は今の質問でほぼ話が出たので、だいたい私のイメージは伝わったかと思うのですけれども。

まあ、この資料しか作っていないということは、本当にこういう方向でいいかどうかという全体の枠組みから変えることもあり得るという上で議論をしたいということです。ただ、何をやっても時間で縛られるので、それを理解した上での意見を言っていたいただければなと思います。ということで、いかがでしょうか。

—— 14時50分からの全体共有のところ、備考のポツの3のところ、1ページ目を見ながらとあるのですが、1ページ目というのは？

(木村) この前の1ページのプリントです。

—— 枠がついていたもの。

(木村) そうです。

—— つまり、グループワークでは5分で話したことを、全体共有では2分くらいに収めていただくと。

(木村) そうです。全体共有では、2分で話して、さらに、グループ内で出た意見につい

て1分で話す。そうすると、計3分。

—— 人からこういう意見をもらいましたって、自分で言わないといけないのですね。

(木村) そうです。自分はこういう意見でまとめてきたと。それはこういう理由でこうなると (2分)。

これに関しては、グループのほうからもこういう意見が出ていますと (1分)。
という話を3分間で話す。

—— 面白い。

—— とても難しいかもしれないですね。

(木村) 難しいかもしれない。

—— そうすると、グループの報告はないわけですね。

(木村) グループ報告はないです。第4回は、個人報告をするために、グループワークを使う。模造紙は、個人報告をするための材料になるということです。

—— 自己啓発セミナーのようですね。最初は5分で話して、グループの皆からわーっと言ってもらって。次に全員の前で2分でしゃべって、皆から何を言われたかも言って。

(木村) そうです。それも自分でしゃべる。

—— その人の変化がよく分かりますね。

—— でも、そうすると、本当はポストイットの色を変えたほうがいいですよ。

—— どことどこですか？

—— 自分の発表に対して、皆さんから出るのは青とピンクだけれども、その後のディスカッションで出た意見は、色を変えたほうが本当は面白いと思うのです。

ただ、調査として、専門家から出た意見なのか、市民から出た意見なのかを取りたいければ、今までどおりなのだけ。

(木村) たぶんそこは、書き起こしで全部分かるので、付箋はいつも通りで大丈夫です。

—— そうすると、ディスカッションのときに出た意見も、専門家から出た意見は青で、市民から出た意見はピンクで書くのですね？

(木村) そのほうがいいと思います。

—— そのディスカッションは、発表者が残りの方の質問に一生懸命答えて解決するような方向なのか。それとも、人の話をよく聞くという立場に立って、残りの方がどんどん意見を言うという方向にするのか。その方針を決めないと、持ち時間の人が自分の意見をわーっと言って終わりということもあれば、残りの方がわーっと言って意見を言って終わりみたいな感じになるので、どちらかにしたほうがいいかなと。

—— それに関連して。そういう意見のやり取りになる場合もあるでしょうけれども、専門家の発表した内容に対して、質問になってしまって、その質疑応答だけであつという間に時間が経っちゃうような気がして。用語ひとつだって、分からなかったら、質問する人はたくさんいると思うのですけど。

—— その可能性もありますね。

(木村) それは、いろいろなバリエーションでいいかなと。ここに関しては成り行きです。だから、どのように展開しようと、記録はすごく大変になるのだけれども、してもらいたいと思っています。

専門家はしゃべりたいことがいっぱいあるだろうし、専門家に聞きたいこともいっぱいあるような気がするので、この時間内で、そういった要望にうまく答えられればなという時間でもあるので。

—— グループワークの中で？

(木村) はい。12分の中で(笑)。

—— 短い人もいるけれども、長い人もいますよね。だけど、長い人でも12分なら12分で切るということですよね？

(木村) そうです。

—— 切らないとあとの人の時間がなくなっちゃうから。

—— これはきっと、時間管理をきちっとやるのが大切だから、料理のタイマーでも持ってきて、12分になってピピッと鳴ったら、すみません、次の方、って切ったほうがいいかもしれませんよね。

—— その切るところも、サブファシリテーターがやっていいですか？

(木村) やったほうがいいと思います。

—— そこは厳しくやるべきですよ。

(木村) ええ。休憩が10分、直後に入れてあるので、この10分をつぶす覚悟でやっていただければと思います。

—— それは班の中の合意ですね。

(木村) 班の中の合意で。

—— 休憩になるとノイズがあまりにも大きくなって、記録が取れないので、そういう方式はやめてほしいのですが。

(木村) だったら、休憩をグループワークの中に、カッコ10分で入れて、休憩を自由に取ってくださってというスタイルにしますか。

—— そのほうがいいのかもわからない。

—— うちが休憩にしましょうかというところもあれば、めいっぱい使ってやる場所もあると。

(木村) でも、次は14時50分から全体共有をやっていかないと進まないんで、というふうにしたほうがいいですか？

—— 私はそのほうがいいと思いますね。

—— 非常にディテールな話に入り込む可能性があって、そうすると、休憩中とかに、観

察している私とか木村先生に質問が飛んでこないとも限らないけれども、

(木村) それは一切受けちゃダメです。

—— 一切受けないと。休憩時間も、原則受けないと。冷たいけど。

(木村) 受けないです。

—— 不公平になりますよ、って。

—— それを最初にきちんとおかないと。あの人たち不親切だね、と言われてもなんだから。

—— すみません、先ほど、ディスカッションの方向は成り行きでいいという話でしたが、そうすると、1人が長くしゃべるとか、内容が偏って他のところにはいかなかったりしても、静観していればいいですか？

—— 時間管理はしっかりやらないと。

—— 時間管理はします。時間管理ではなくて、例えば1人の話が長くなったら、ちょっと、というようなこともしなくてもいい？

—— でも、ファシリテーターは持ち回りでいるわけですよね？

(木村) はい、います。それに、当然1分ルールは入れているので。1分ルールとって、(ディスカッションの時間は)3分くらいだから、2人くらいで終わってしまうけど。

—— 私は、3分で各自が意見の表明をするのも難しいのではないかと思うのです。

—— そこはできますよ。

—— そこまではできるのですけど。残りのディスカッションが、1人がしゃべって終わってしまうくらいの時間だったりして。

(木村) 意見表明までは、たぶんできるのですよ。付箋を書くから。書いてもらって、自分の意見をちゃんと言うのは、できるのです。

—— で、その後のディスカッションが発散するというか。

—— ディスカッションはあまり期待できないですね。

—— 5人いるところは2分しかないですから。

—— でも、ディスカッションのきっかけとして、多くの方が意見を言ってくださるわけなので、本人がそれに関してコメントを言い始めるところからスタートするとか。そんな感じにしておいたらどうでしょうか。

—— 2分で書いて、3分で意見表明したら、言われたほうの発表者はたまっちゃうから、やはり答えたくくなりますよね。

—— 皆から出た意見を見て、発表した人がまたコメントするくらいで終わりますね。

(木村) だから、意見表明のところは、発表した人は口は開いちゃ駄目ですね。そこで議論を始めると、とても3分では終わらなくなるので。

それが一通り終わった後、じゃあちょっと時間があと2分くらいなので、ということでディスカッションするとか。下手をすると、意見表明が終わった時点で終わる可能性だってある。4人だったら、その後5分くらい時間があるでしょうから、少し対応できる可能性はあるんですけど。

それで、確かにディスカッションするときにコメントから始めてくださいというのはいいと思います。もしくは、意見、あれば質問もと入れておけば、意見に対する意見、もしくは質問に答える時間にしていただきって、そのくらいのガイドラインを示すのはいいですね。

—— 3分で、発表者以外の3、4人が、質問か意見をとにかく先に全部言う。その間はスピーカーは答えないと。

それが終わってから、残り時間のディスカッションでスピーカーがそれに関して話し始めると。

—— そうでしょうね。

—— だから、追加の意見はほとんど難しいと思いますね、時間的に。

—— 5分の最初の持ち時間で話す内容にかなりの開きがあったり、1分で終わっちゃう人もいるかもしれないですね。

そうしたら、3分で意見表明をして、ディスカッションの時間はそこでは取らないで、全員分やってから、最後に、一番議論したいところはここです、ってやり方のほうがいいかもしれない。

(木村) 最初はそれも考えたんです。全体を見てから、もう1回っていうのも。それは今話しているのとは違うバージョンで、もし、テーマごとに均等に人数が分かれたら、それができるかなと思って。

—— 私はそれが面白いかなと思ったのですが。

(木村) このグループはこのテーマの人って分けられるなら、自分の意見を言って、それに対する意見を全部貼って、それが全員分終わった後にフリーディスカッションとか、そういうのが面白いなと思ったのですけど。

人数が偏ったら、できないのですね。

—— そうですね。まあ、偏りますね。

—— 安全チームとか、エネルギーチームとか。

(木村) そういうことです。その場合は、全体発表も個人ではなくて、グループでやってもらう。その上で、この前みたいに質問タイムを作れるのですけど。

こればかりは、集まってみないと分からないところがある。

—— そうですね。もし先に集まっていれば、3つのテーマごとに3つのグループとか、そういうことも考えられるかもしれないけど。偏っているかもしれないし、分からないですね。

(木村) そうなのです。7月1日に投函して、こちらに届くのは7月3日、4日とか、ギリギリでしょうね。

—— 投函するのは1日の夕方かもしれないですね。

—— 質問いいですか。グループワークのときの話ですが。

付箋に書いて、意見表明をするときに、付箋に書いていない大切なことをおっしゃる場

合がありますよね。それも拾っていいのですか？

—— それは拾わないといけないのでは。

(木村) それは拾わないと駄目です。それに関しては、今までのサブファシリテーターの役割と一緒にです。

—— それはいいんですよね？ ディスカッションのところだけではなくて、意見表明のところも拾っていいんですよね？

(木村) はい。

—— 先ほど、手が挙がっていましたけど。

—— いえ、私の質問は終わりました。グループ分けをするのかどうかを伺いたかったの
で。

(木村) それは、見てみないと分からないところがあつて。

もし、テーマごとに均等に、3つに分かれそうだったら、そのほうがいいですか？ ただ、2人だけこれに関して答えましたとか、そういうのが出てきそうな気がして。これはもう組み合わせの妙を祈るしかないんですけど。

—— テーマは3つなのですか。グループは4つですよね。

(木村) いや、テーマ3つでうまく分かれたら、グループを3つにして、その場合は、第3回と同じような枠組みに変えるということです。45分のグループワークを2回。最初に皆が意見を表明した上で意見交換をして、その問題に対して、どういうまとめができるかとか、それでもいいかなと思うんですけど、どうですか？

—— そうすると、A、B、Cにテーマを分けて、A班の模造紙にB班、C班の人が質問を貼るという方式ですか？

(木村) そうです。このようにまとめましたという全体共有をした後、また質問づくりの時間を作って、2回目は質問に対する回答。第2回、第3回の流れを踏襲したグループワークにすることも、うまく6人、6人、6人とかに分かれればできる。でも、これが10人、4人、4人とかになったら、できない。

—— でも、例えば10人、4人、4人ぐらいだったら、10人になっているテーマは2グループという形で、4班でやるのはダメなのですか？

(木村) できないことはないのですが、発表時間がかさんでくるので、そうすると、グループワーク時間が減って、回らない可能性も出てくるので。

—— 前2回で、1つのルーティンが皆さんの頭の中に入っているから、できるだけそのルーティンを守ったほうが、皆さんのなじみはいいですね。

(木村) なじみはいいです。

—— 方式が変わると、それになじむのにまた時間がかかるので。

(木村) それはあるんですけどね。

どうですか、運よくそういうふうに分けられたら、分けたほうがいいですか？

—— 私は、分けられるなら分けたほうが良いと思う。

—— 例えば、「エネルギー」と「安全」という話が同じグループで出てしまうと、話が広がりすぎちゃうから、やはり、同じテーマで集まったほうが良いような気がします。ただでさえ発散しがちなイメージがあるので。運を天に任せるしかないのだけど。

—— 3つテーマがありましたよね。1つだけ選ぶんですって？

(木村) そうです。

—— だけど、複数選んでもいいと説明したから。

—— 複数選んだ人はどちらにいてもいいということですよ。

—— そうですね。そうすると、複数選んでくれたほうが編成はしやすいかもしれない。

(木村) ただ、F4・5みたいに組んだのは、誰が何に一番関心があるのか。3個選んだとしても、自分の持ち時間内で話せるところで順位が決まってくるので、そういう中で何が一番関心があるのか。それは人によって様々で、それに対していろいろな意見もあって、

というのを知るっていう意味もあって、こういうやり方も 1 回くらいはチャレンジしてもいいかなという気がしている、ということなのですよ。

—— やはりテーマごとに分かれることができたほうが、満足感はあるかなと思うのです。アンケートを見ていると、話が深めきれないとか、時間が足りないとか、そういうところに不満を覚えている方が多いみたいなので。

(木村) そうですよ。本当にそう思うのですよ。

—— グループの意見がまとめられるほうが達成感もありますよね。自分の意見は自分の意見としてあったけれども、グループの意見に仮に自分の意見が反映できれば、ものすごい充実感があるし。

個人の発表で終わってしまうのは、そういう意味で言うと、少し違うなど。

(木村) ただ、これに近いスタイルでやったことが昔ありますけど、それはそれで満足感が高く出てくるのですよね。個人の意見を個人が表明するとか、いろんな人から意見を聞くとか、あまりやったことがないので。

では、返ってきた様子を見て、グループにできそうであれば、グループ型で作ります。ダメだったら、このスタイル (F4-5) でいくと。そういう感じでよろしいですか。

—— この形でいくとして、2 つほど質問です。

1 つが、14 時 50 分からの全体共有で、関心がある人は 60 分間集中して聞けると思うのですけれども、ある意味、他の人がずっと 60 分間話していると、長いじゃないですか。そういう意味で、その時間も付箋にコメント書いて、それに回答する時間はないけれども、それが発表者のもとに行くとか。書くか書かないかは自由だけど、書きたいことがあったらどうぞ、ぐらいのものを入れてはどうですか。

(木村) それは、やろうと思ったけど、時間が足りないのですよ。

書いている間に次の人の発表が始まったら、それを聞かないから、意見を書く時間を取らないといけない。1 分じゃ短いと言われる。そういう経験から、その方式はできないと私は思ったのです。

最初は何を考えたかという、最初に 2 分ずつ話してもらって、間に 2 分ずつ意見を書く時間を取って、書き終わったらその人のところに貼って、次の人に行く。そういうのを考えたのですけど、時間が回らないのです。

—— 今までは、意見をたくさん出すことが大事だったじゃないですか。でも、今回は、

一番言いたい意見だけ出てくればいいのかなど思ったりしているのですが、やはり 2 分あったほうがいいのかということですか？ 2 分取ると、たくさん意見が出てくるのですが、それを全部は触れないじゃないですか。時間がなくて。

(木村) 触るといえるのは？

—— グループディスカッションのときにはそこまでいかないのです。たぶん、一番言いたい意見だけが出てくるほうが、収まりがつくのかなと思ったのですが。

(木村) すみません、それはグループワークの話ですか？ それとも、

—— 今はグループワークの議論です。グループワークの中で、各自の意見を書くところで 2 分取っているのを、1 分にすれば、

(木村) いや、1 分だと書ききれないというコメントが出ていたので、2 分取ってあるわけです。この前のスケジュール表で、1 分で書いてくださいと書いたけど、1 分じゃ誰も書けないと言っていたから。それを考えると、1 分でスケジュールを組んでも絶対に回らないので、無理です。

—— 分かりました。

もうひとつは、サブファシリテーターが D 班に 3 人入っているのですけれども、3 人は多いかなと思います。

(木村) 確かに、4 班にしたときにどのように配分するかは、少し考えたほうがいいと思います。そこは（元気ネットさんの中で）検討していただいていいですか。私が勝手に振り分けると、なんか違うことになるだろうなと思ったので。では、そこに関しては後で、直前でも構わないのですが、少し検討していただければ。

—— まだ 3 班になるか、4 班になるかも分からないということですね。

(木村) そういうことです。

—— もし 4 班になったときの準備として。

(木村) はい。こういうパターンがありうるというのを、少し検討していただいて。

—— もうバラバラになっても、皆できますよ。今回は、グルーピングもないわけですよ
ね。

(木村) そうです。グルーピングも何もない。発言を拾って、どんどん貼っていただけ
です。

グルーピングするとしたら、話した本人が、勝手に自分たちでやるのは構わないと思
います。

—— そのほうが、(本人にとって) あとの発表がしやすいですよ。

(木村) ええ。

だから例えば、グループワークが終わった後に、この後、1人3分ずつ持ち時間があって、
その中でここで出た意見も話さないといけないので、各自のスペースのところは自分で話
しやすいようにまとめたりしておいてくださいね、というのも、その人にお任せする。

では、第4回は、そんな形で進めたいと思います。ギリギリになってしまうと思います
けれども、また11時集合で、30分くらいチェックさせていただければと思いますので、よ
ろしくお願いします。

次の3つの資料(F4-6-1~F4-6-3)は、第3回のグループワークの付箋をパパッとまと
めていただいたということですので、ご参考までということでお配りしています。

では、次に進める前に、少し休憩をいれたいと思います。今15時10分くらいなので、
20分まで休憩しましょう。

3. 第5回フォーラムについて

(木村) では後半を始めたいと思います。第5回のフォーラムについてということで、
まず皆さんにご報告ですけれども、外部評価委員会の先生方と、このプロジェクトのPO(プ
ログラムオフィサー)に、第5回のフォーラムにはぜひご視察いかがでしょうかというこ
とを案内しております。

今のところ、外部評価委員の先生お二人から、見に行きますという連絡が来ています。

POは、他との兼ね合いで調整してみますということでした。実はこういうプログラムっ
て、研究の途中でいろいろと視察が入るのですけれども、我々としては、フォーラムをや
っているときに視察をしてもらわないと意味がないので、来てもらえたらいいなと思っ
ています。

ということで、第5回のときは、プラスアルファで先生方が入ります。その先生たちを
皆さんにどう紹介するかということが、1つ目に考えなければいけないことです。

それから、PO が来られた場合、最後に挨拶ぐらいいただいたほうがいいのか、ないほうがいいのか。プログラムに入る前に、少しその辺についてご意見を聞きたいのですが、いかがでしょうか。

あくまでご視察ということで、その場は見てもらう。でも、「今日はこの研究プログラムの外部評価委員の先生と、文科省のプログラムの中の総責任者の方がいらっしゃっています。今日のご視察ということで、特に皆さんに加わることはないですけれども、いらっしゃいますので」ということは最初に紹介しないといけないと思います。

(土田) 学校の授業と同じような気がするんですね。参加者は、あらかじめ定義されたフォーラムに、定義された通りに来ているわけです。途中から定義を変えられると、やはり混乱すると思うので。まあ、でも授業参観ですよ、みたいな形で、見に来ている人がいますから、皆さん、いないものだと思ってやってくださいねというような、簡単な紹介でいいのではないですか。

—— PO にしても、何を話していいか悩まれるだろうし、聞いているほうも、いきなり関係のない人が来て何なの？ という感じになるでしょうね。

文科省の研究でやっていますというのは冒頭で説明があったわけだから、その責任者の方が見に来ています、というのは差し支えないと思うけれども、ご挨拶はいただかないほうがいいと思います。

(土田) やはり、予断を与えるのは、不確定要素ですから、(PO が) 話すにしても、終わったあとでしょうね。

(木村) 当然です。

—— 研究にとっては大事なご発言でも、参加者にとっては、ああ、やっぱり原子カムラの何かだったのね、みたいな、特定の印象を与えてしまうかもしれない。話していただくとしたら、反省会のときに話していただくとか。

でも、第5回はそれはないのですよね？ 懇親会なのですよね。

(木村) 懇親会をやるかどうか、議論しなければいけないんですけど。

—— とりあえず、最初にお話いただくのは避けたほうがいいかなと。

(木村) あ、最初じゃなくて、全部終わった後です。私が最後に一言話すと思いますけど、そのくらいのタイミングで、岩田先生に一言、このプログラムはどういうことを目指

しているんだ、みたいなことを話してもらおうと、ああ、こういうことで私たちは参加していたのか、ちゃんとした研究プログラムなんだな、ということも再確認できるかなと思っていたのですが、なくてもいいかなとも思っています。

—— 木村先生の話と同じような内容なら、重なるから意味がないし。違うことを言うと、あれってということになるから、それもよくないし。だから、やはり挨拶はいただかないほうがいい気がします。

(木村) 分かりました。では、積極的にはそういうことはしないという方向で。

一応、文科省の資金関係者、あとはこの研究の関係者は、メンバーリスト以外にも来ることがあるということは最初にお伝えしているので、その範囲の中で来ていますということなので、大丈夫だと思います。ただ、「誰？ マスメディアが来ているの？」みたいにならないような配慮はしなければならないと思いますので、最初に総合ファシリテーターから軽く触れていただくと。

—— はい。スポンサーがいらしていますと。

(木村) はい。スポンサー及び評価者がいらしていますと。

—— ええと、どう言えばいいですか？ 文部科学省の？

(木村) 文部科学省の原子力イニシアティブの枠組みの最高責任者です。文部科学省の人ではないのですが、この枠組みの中での研究の総括。

—— JST 関係ですか？

(木村) JST ではなくて、文科省が「原子力基礎基盤戦略研究イニシアティブ」というプログラムを持っていて、その中にいくつか採択があるのですけれども、このイニシアティブの枠組みの最高責任者です。それは研究者がやっているのです。

—— 分かりました。

(土田) 私は、これはスポンサーと言うべきだと思います。研究内容まで指示されてやっているという印象を与えるのはよろしくないなので、あくまでも研究は我々が主体でやっていて、スポンサーが見に来ていますよ。ちゃんとお金を使っているか確認しますよ、くらいがいいと思います。

(木村) では、そのくらいにしておきましょう。

—— 同感です。

—— ひと悶着ある可能性もありますね。我々は最初から位置づけを説明されているからいいとしても、研究者じゃない人にどうして見せるのか、って。

(木村) いえ、最初に、スポンサー、関係者には見せませんと言っているのです、大丈夫です。それは紙にも書いてあります。一般公開はしません。マスメディア等にも出さないということ。あとは、研究関係者および文科省関係の人は来る可能性がありますと言っているのです、大丈夫です。一応（視察は）想定していたので。

では、次は懇親会の議論です。懇親会をやるかやらないかを決めたら、次回ちゃんとアウンスをしておかないといけないと思うので。やりましょうという声も聞きますが、こちらが主としてやったほうがいいのか、どうなのかです。

(土田) 主としてやったほうがいいと思います。好きな人同士やってくださいねといったら、ためらう人とか、あまり乗れない人もいるでしょうし。正式にやるんですと声をかければ、出やすくなると思います。

—— 声をかけて、自由参加で。強制はしませんと。

—— 最初もそうでしたよね。

(木村) 最初もそうでした。

2週間前なので、急すぎるとかはあるかもしれないけど。まあ、やってもいいかなという雰囲気を、我々側で感じたので、ということですよ。

—— 少なくとも、雰囲気はよくなっていると思うのですよ。このあいだも、終わった後に皆さん残って話していましたからね。

—— 参加者は、やってもらいたいと思っているような気がします。

—— やるんですよ、みたいに言う方もいらっしゃいましたよね。

(木村) では、やる方向で。第1回と同じようなやり方でいいですよ。

—— 懇親会には、外部評価委員は参加しないということでもいいですか？ 参加していただかないほうが良いような。

(木村) どうですか。来てもらったら、いてもらってもいいかなと思いますけど。

—— 懇親会は、全然中身の議論と関係ないから、大丈夫だと思いますけど。

—— 後で書いて送ってもらうアンケートがあるんですけどっけ？

(木村) そうです。F4-8はそれの案です。

—— うーん、そうか。いや、いろいろ見てくださる方が、直接（参加者に）話して下さったりすると、いろいろコミュニケーションになるかなと思うのですが、そこでいろいろな情報が入っちゃうと、アンケートが違ってくるのですよね。だから、後で取るものがないのだったら、せっかくですから、どんどん話していただきたいと思うんですけど。

(土田) そうですね。いいことを言ってくださいました。

(木村) 懇親会は、それもあって、入れるのをためらったところもあるんですけど。

(土田) シンポジウムで懇親会をして、第5回はなしにしましょうか？

—— シンポジウムは全員来るのですか？

(木村) シンポジウムは任意です。全員集まるのは第5回までなので。そういう意味では、参加者のことを考えたら、やったほうが良い気はしますが。

(土田) ええと、待ってくださいね。懇親会の意見変化もフォーラムの一環であると捉えるならば、まあ、アンケートに影響を与えても、フォーラムの影響だと見ますか？

(木村) それしか取りようがないかなと。

—— そうすると、外部評価の先生方は参加しないほうが良いですね。

(木村) しないほうが良いですね。もしくは、参加したとしても、あまり（参加者と）

しゃべらないでくださいと。

—— それは難しいですよ。

(土田) そうですね。そこで参加者からいろいろな話が聞けるだろうと思われたら、積極的に話しかけられるでしょうね。

(木村) でも、話しかけてもらったほうが、評価的にはいいのですけどね。外部評価委員の先生方が、情報収集をその場でやっていただけるので。

(土田) どうでしょうね。でも、その機会はやはりシンポジウムでしてほしいな。

(木村) シンポジウムは、表には誰が参加したのか分からないようにしなければいけないので、その場に参加者が来ていたとしても、こちらから何かはたらきかけるのはよくないのですよね。

(土田) シンポジウムの後でまた懇親会をするとか。

(木村) それは大変だと思います。

—— アンケートは書くのに何分くらいかかるのですか？

(土田) これからの議論なのですけど、最大で1時間。ただ、本当に熱心な人だったら、2時間かける可能性はあります。

—— 例えば、第5回の最後に、きちんとアンケートを書いていただくために30分くらい時間を取って、そこで書いてもらって、その間に懇親会の準備を横でしているとか。

(土田) 自由記述を無くせば、足りるかもしれません。前に答えたことがあるような質問もありますので。何も考えずに第一印象で丸をつけていってくださいということを強制すれば、30分であがるかもしれませんが。

(木村) でも、後ろを区切って答えてもらうのは、もったいないかもしれないのですよね。

(土田) そうなのですよ。

—— そうですね。アンケートは変化を見るためのものでもあるので。事前アンケートはゆっくり時間をかけてやってもらったのに、事後アンケートは時間を区切ってしまうと、それだけで条件が変わってしまうので。

(木村) ただ、例えば、フォーラム終了後、懇親会は17時からですと言って、残ってもらって、30分間はアンケートを書いてください、でやってもらう手もないことはない。16時半にフォーラムが終了して、17時から懇親会を始めたいと思うので、我々はセッティングしていますが、懇親会に参加される皆さんは、この場で書いて、この場で提出していただければ助かりますと。懇親会に出ない人は16時半で帰る。持って帰ってもらって、あとで郵送すると。

—— でも、懇親会に出たいけど、30分では書き終わらない、もっと書きたいっていう人はどうしますか？

(土田) 懇親会を18時から始めるとか。

(木村) そこまでは待たないと思います。

—— そこまでは残らないですよ。直後にあるから残るので、間に時間があったら、女の人は帰りますよ。

(木村) 30分がギリギリですよ。

—— 30分がギリギリですね。

(土田) そうか。で、拘束時間は16時半までなのですよ。

(木村) で、30分くらいはなんだかんだ準備するのに時間がかかるし、その間にちょっとアンケートを、ごたごたするけど、気にしないでやってくださいねと。

でも、次に懇親会があると思うと、わーって書きちゃうかもしれないですね。

—— うるさいところでは書けないですよ。

(土田) 覗きこまれると思ったら書けない。

—— やはり、誰もいない自分の部屋で、ゆっくり考えて書きたいと思いますよね。

(土田) これは、もう割り切るしかないですね。懇親会もフォーラムの効果のひとつであったと。

—— このアンケートは無記名？

(土田) いえ、記名です。

(木村) では、なるべく外乱は外すために、外部評価委員会の方、POの方には、泣く泣く外していただくと。

(土田) そうですね。

—— 例えば、乾杯は一緒にして、最初の30分くらいはいていただいて、それで早めに帰っていただくというのは？ 最後まで延々といてもらったら、いろいろなことをしゃべってしまって、印象が強すぎるというのがあるので。

(土田) どうなのでしょう、木村先生。やはり効果測定をしているフォーラムですから、外部の人から影響を受けるのは、排除したほうがいいんじゃないですか。だから、評価委員の方に聞いてもらうというのは、対スポンサー的にはいいのだけど、でもそれは研究の趣旨から外れるんじゃないのかなと。

—— それか、失礼だけど、アンケートに影響する可能性があるので、参加者とお話はお断りして、いていただく。スタッフと話をする分にはいいじゃないですか。

(木村) 第1回の懇親会のときも、なるべく運営側の方は参加者とは触れ合わないようお願いしたと思いますけれども、それは今回もお願いしたいと思います。

とりあえず懇親会は、少し距離を取りながら、いい感じでやってもらうというのはいいかもしれない。

(土田) ええと、アンケートに関係します所以说いますがけれども、原子カムラは何かと定義したときに、文科省が入ってくる可能性があるのですよね。政府とか。そうすると、最後の最後に文科省から何かご指導が入って、我々の意見に圧力が加わったというようなことを参加者にも思われたくないし、ネットに公表したときに、やはり操作しているのねって見られると、痛くもない腹を探られることになります。

—— 揚げ足をとられる可能性はありますね。

—— 最後の振り返りのときに、文科省が後ろで無言の圧力をかけていた、とか。

—— ちょっといいですか。視察される方々のご紹介のときに、どう表現するかというところで、「スポンサー」という言葉でいいだろうと。先生方の間では、本当にごくビジネスライクに、お金を出してくれる人というふうに了解されていると思うのですが、一般的にそうなのだろうか。

スポンサーって外来語だから、語感が確立されていないですね。なので、「スポンサー」と言うと、お金も出すけど口も出す、何かあったら圧力をかけるとか、そういう存在だと感じないことはないのかなと思いました。

—— それは私も感じます。

—— 先ほど、先生方は認識が違うんだなって思いました。

(土田) それはよく分かります。電力会社から研究費をもらったというだけで、圧力をかけられているんだろうというふうに、マスコミでさえ、そう捉えますもんね。

—— 確かに、今危惧するような指摘をされたら、言い返せないですよ。

(土田) 金は出すけど、口は出していません、とはね。

(木村) では、「外部評価者」ですね。この研究プロジェクトの外部評価者の方が、視察に見えていますという話。

でも、外部評価者だったら、やはり懇親会に出るのはやばいですね。それはいわゆる痛くもない腹を探られるようなことになりうるので、懇親会は遠慮していただきたいをお願いします。

—— フォーラム本体を参観しているほうが、懇親会でお酒を飲んでいるときに一緒にいるよりも、圧力を感じると思うけど。

—— でも、研究の外部評価者が見に来るというのは、仕方がないんじゃないかなって。私は受け入れやすい感じがするのですけど。

—— だから、「研究の」って何回も言ったほうがいいですよ。

(木村) そうですね。外部評価者、ああ、第三者的に見ようという努力があるのね、くらいに取ってくれば良いと思うのですけど。

—— そういうふうになると思います。

—— 滞在時間というとなんなのですけど、時間はどんな感じなのですか？ 長いのは良くないような。

(木村) 一応、第5回は最初から最後までいてもらう予定です。

—— もし懇親会に残っていただくなら、私たちがお話しして、なるべく参加者と接しないようにすればいいのではないですか？

(木村) ええ、それでいいかな。

—— 外部評価の皆さんも、懇親会をご遠慮くださいと言われると、さみしいと思うのですよ。わざわざ来て、最後なのに、懇親会はお帰りくださいって言われると、ちょっと冷たい感じはしますよね。

—— ただ、アンケート調査前なので、あまり参加者と深くコミュニケーションを取らないでいただいたほうがうれしいとか、やはりそれは一言お話をしておいたほうがいいと思います。

(木村) はい。また直前になったら、「ご視察のための注意事項」はまとめて出そうとは思っています。それをしないと危ないから。

(土田) 同じ場において、酒を飲んで、参加者の人たちが話しているのを聞くだけにしてください、ということでもいいんじゃないですか。

(木村) そうですね。どんなふうに盛り上がっているのかがその場で分かると、それはいい評価になりますからね。

—— 参加者とサブファシリテーターは、名札の色が違うんですけど？

—— だから、名札をつけていただければいいですよ。

—— 録音・録画について、最初にいつも許可を求めるじゃないですか。だから、外部評価者のご視察がありますけれども、ご了解いただけますかって聞いたほうがいいと思います。

(木村) それだったら、第4回で了解を得たほうがいいですね。次回(第5回)はいらっしやいますって。もし、ちょっと、ということがあれば、これから、申しわけなかったですけれども、ということでお断りしますけれども、よろしいでしょうか。それは第4回でやったほうがいいですね。

—— 録音・録画で毎回ああやって丁寧に了解をもらっているから、そのくらい丁寧にやったほうがいいかもしれませんね。

(木村) それは総合ファシリテーターから言ってもらったほうがいいですよ。

—— はい。第4回の最後に。

(木村) 最後に一言振り返りがあって、その後私が一言言った後がいいですか？

—— 次回のテーマの後にしますか。次回のテーマからアンケート記入に移るところで、私が、「その次回なのですけど」ってお話をする。

(木村) ただ、最後に懇親会があるという話も一緒にしたほうがいいと思うのですよ。懇親会の話は、たぶん、最後のほうがいい。アンケート記入の前に懇親会の話をするのも変なので。内容によって分けますか？

—— では、アンケート記入が終わって、特に言っておきたいことの一言も終わって、研究代表者からの話があった後にしましょうか。

(木村) では、プログラムの一番下に、また次回の日時とかをつけておきますので、それを読んでいただきながら、その流れで、なお、次回に関しては、こういうことが考えられているんですけども、いかがでしょうか。問題なければ正式に。

—— 分かりました。では、16時30分のフォーラム終了というところで、アンケートをきちんとお戻しくださいという話と、次回の日時と、次回は外部評価者のご視察を予定した

いのですが、研究プロジェクトなので、そういう方の視察を一度受け入れるということを考えていたのですが、最後によろしいですかと伺う。プラス、次回は懇親会もやりたいと。

(木村) そんなに問題にはならないと思うのですけど。ただ、いきなり第 5 回の頭にぱつと言うよりは、そのくらい慎重にやったほうがいいかもしれないですね。

やはり、第 5 回まで今日の議題にしておいてよかったですね。

—— 参加者の了解の下でやったことだと。

(木村) はい。では、第 5 回について、もう 1 つだけ決めておきたいのは、グループワークのテーマです。それについて少し意見をいただきたいと思っています。

テーマが決まれば、第 5 回に関しては、第 2 回、第 3 回とまったく同じ構成でやってもいいかなと思っています。

テーマとして元々出していたのは、『フォーラムを通して、私たちは変わっただろうか?』です。ただ、これがちょっと漠然としているのかなという気もしていて、少し明確化をしたいなと思っています。

資料が前後してしまいますけれども、第 4 回フォーラムスケジュール表 (F4-5) の中の、16 時からのセル、備考のところですが、次回はまとめということで、『フォーラムを通して、私たちは変わっただろうか?』のあとに、2 つぐらい書いてあります。『「原子カメラの境界を越える」とはどういうことなのか?』『どうしたら越えられるのか?』と書いていますけども、こういう話し合いをもう 1 回やったほうがいいのか。それとも、「私たちは変わっただろうか?」というシンプルな問いでやったほうがいいのか。ここに関して、少しご意見を聞きたいなと思っています。

—— 「私たち」ではなくて、やはり、「私は変わっただろうか?」のほうがいいのではないかと思います。一人称で話しましょうと言っているのです。

(木村) 確かに。

でも、なんだろう、今になってみると、「変わっただろうか?」って、変かなと思っています。

—— そうですね。「フォーラムを通して、私は何か気がついたらどうか?」とか。変わってはいないけど、気がついたとか。

—— 気がついたこととか、得たものとか。

—— そういうテーマで話すと、その場で気がつくこともあるかもしれない。他の人の話を聞いて。

—— 「原子カムの境界を越える」ということが今回の研究テーマだったわけですね。ですから、例えば、「フォーラムを通して、私は原子カムの境界を越えただろうか？」とか。その後、「私は変わったろうか？」とか続けると、ああ、今回は私が変わることが問題だったんだ、って初めて気づく人がいるのではないかと思うのです。

なんとなく、私が変わる、ではなくて、誰かが変われば、というような気持ちで参加されていた方が多いと思うので。最後のこの話し合いで、そうか、これは私が変わることを期待されていたのかって初めて気づく人もいると思うので、このテーマはいいんじゃないかと思いますけど。

(木村) ただ、変わることを強制してはいけない気がします。

—— 「変わる」というのは失礼ですね。今のあなたじゃダメって言われている感じがします。

—— そうですね。変わることがいいことで、変わらなかったらダメだったんだって。

—— 関心についても、そういう議論がありましたよね。

(木村) そうです。そういうことがあるので、気軽に「変わる」って使うと、怖いかなと。

—— では、やはり「フォーラムを通して、気がついたこと」とか、「感じたこと」とか。

(土田) 「発見」なんてどうですか。私たちは何か発見したのだろうか。

—— でも、気づきや発見は、毎回アンケートで取っているわけですね。

—— だけど、「原子カムの境界」という最初のテーマを思い出させるという今のお話も捨てがたいですね。

(土田) 参加者が変わるということがこのフォーラムの重要事項だったのか。それとも、世間が変わるということが重要事項だったのか。やはり焦点をしばらないといけないと思いますね。

自分が変わるというのであれば、こういうフォーラムの数をこなせばいいという話になるし。このフォーラムを使って、世間に対してこういうはたらきかけがありますっていうことを探るためだったら、やはり世間が変わるといふほうに比重はあると思うし。

—— 原子カムラの境界というものが、非常に固定的なもので、越えられないものだったか。あるいは、こういう工夫をすれば越えられるということが分かったのか。ということをも、このフォーラムを通じて、我々は測定をしたと。

(土田) 個人であれば、私のということで簡単なのですが。だから、我々は越えましたよ、だから世間も越えられますよね、という議論に持っていくということをひとつ焦点化しないと。いや、それであればですよ。

ただ、世間に、こういうことがあるから越えられないでいるのですよね、ということ言えばいいということであれば、何も本人は変わる必要はない。

例えば、誤解でしたと。専門家の方々というのはこういうふうに見えていたけど、実は違っていました。であれば、他の世間の人たちも、この誤解さえ解いてくれば、境界がなくなりますよ、という結論になるじゃないですか。そういう議論をしたいのか、ですよ。

(木村) たぶん、フォーラムを通して変わることを強要するような問い方はよくないと思います。

けど、この研究としては、やはり原子カムラの境界を越えることに何らかの方向性を見出すこともやりたいとなると、シンプルに、「原子カムラの境界は越えられるだろうか？」です。

—— 素直ですね。

—— 「原子カムラの境界はあったのか？」とか。

(土田) 私はそちらのほうがいいと思う。

—— 越えるっていうと、ある程度の高さでリジッドなものがあることを肯定することになるから。

—— あったのか、というシンプルなほうがいいかもしれませんね。

—— 「あったのか」だと過去形ですけど、「あるのか」でもいいですよ。

(木村) そうすると、「原子カムラの境界はあるのか? あるとしたら、どうしたら越えられるのか?」。

—— 最初に話したテーマに近いですね。

(木村) 第1回は「原子カムラとはなんだろうか?」です。

「どういものなのか」と聞いちゃうと、また最初の議論に立ち戻って、また構造がどうのこうのみたいになってしまうような気もするので。まあ、そうやって最初に回帰してもいいんですけど、5回で回帰しちゃうのもつまらないな、というのもあって。

「原子カムラの境界はあるのか?」。

—— やはり「あったのか」じゃないですか? これは単純な過去とか現在とか未来とかの時勢の問題じゃないですよ。あったのか。

—— やはり、4回やり終えて、あったのか、ですよ。あると思って来て、やはりあった。分からなかったけど、あった。なかった。

—— そういうテーマで議論をすると、また原子カムラの定義の話は出てきますよね。

(木村) そうなると思うのですよ。

—— でも、最後だから、少しポジティブに、あったと思ったら、どうやって越えるのかとか、そういうことを皆で話し合っていく。

—— やはり、最初のその話を最後にもしないと、締りが悪いですよ。

おそらく、原子カムラってものすごく広い概念があるけれども、少なくとも、専門家との会話はもっと重たいものだと思っていたけども、意外と普通にできるものだということは分かったのではないかと。そんなところに落ち着くようなイメージがしますね。

そうすると、原子カムラというけれども、その中のある狭いコンセプトについては、越えられるかもしれないと。利権とか何か難しいところの話になってしまったら、それはちょっと分からない。こんな話になるかもしれない。

—— 一方で、一般参加者から見たときに、私は、原子カムラというのは、はっきり分らないけど、薄々あるかなと思ったけど、やはりそういう人たちが目の前で話すのを聞いたら、人として接すればコミュニケーションが成立するのは分かったけれども、やはり

言うことは原子カムラの人だな、という認識を改めて持ちました、という感想もあるかなと思うんですけど。

—— あるかもしれない。

—— でも、それはあってもいいのですよね。

—— あってもいい。そういう感想であれば、そう簡単には越えられないかもねと。

—— 個人の会話ではある程度は越えられるけれども、組織とかの問題になると、越えられないものが大きくクローズアップされた、という話になるのではないかなと。

—— そういう話になるかもしれない。

—— 越えられるものと、越えられないもの、漠然とそういうものが見えてきた気がする、とか。

—— でも、そこが見えるだけでもいいのですよね。気がついたのだから。

—— 「原子カムラとは何？」とか、本当に初回のような白紙の状態に戻ってしまうことはないと思うのですよね。やはりこれだけ、まあ、なかなか深めきれないとはいえ、皆さんお話をしてくれているから、それなりに自分の中で考えてきたこともあると思うので、最初の状態に戻ることはないと思います。希望的観測ですけど。

(土田) あとひとつ、市民の視点の話が多いけど、例えば専門家の中に、袋叩きにあうんじゃないかって覚悟してきましたという人がいたじゃないですか。専門家自身が、もう自分たちは特殊で、隔離されていると思っていたのだけど、一般の人たちはそんなふうに見ていないという形で、越えられるという声が出てくることを期待しているのですけどね。

—— 前回だったと思うけど、原子力と一口に言っても、その中でいろいろ細分化されている。その中で、総合的に市民の人に説明できるような人が必要だ、という意見が出ていました。そういう意見が出るということだけでも、気づきはあったんじゃないかなと。

(土田) そうなのですよ。私は、専門家のほうから、こうやったら越えられるっていうアイデアが出てくるのが、一番生産的ではないかと思うのです。

—— であるならば、5回のフォーラムに参加して、自分はこういうことだったらできるとか。そういうアクションにつながるようなことが、それぞれのレベルで言えるような問いかけにするといいのではないかと個人的に思うのですけど。

(土田) そうですね。あの、これは使えないアイデアなのですけど、まったく偏見と予断でいけば、「原子カムの幻想を打ち砕くには」というのが、私が一番つけたいテーマなのですよ。

—— 私たちは5回参加して話し合いました。その結果どうするの、みたいな。

(土田) そこまで行くといいですよ。第1回で「なんだろうか」ということで定義を話し合っ。いろいろぐるーと回ってきて、最後にアクションまでアイデアが出るようになったら、素晴らしいじゃないですか。

(木村) アクションはいいのだけど、その前に、原子カムがあるかどうか結論をつけていないし、そこに結論は求めないのに、「越えるアクション」は無理なのですよ。

前回、「無関心は本当にダメなのか？」ってつけましたけど、あれが無かったら危なかったわけですね。それと同じなのですよ。

ただ、研究のテーマとして、「原子カムの境界を越える」というのはひとつのキーワードでやってきているので、このキーワードを使う分には別に問題はないのだけれども、その他の文言を使う場合には、気をつけなければいけない。

—— どうしたらいいのかというところまで誘導がましくやると、結局推進のためのあれだったんじゃないの、洗脳だったんじゃないの、みたいに受け取られる可能性はありますよね。アクションまで求めると。

(木村) そうなのです。

それなので、『「原子カムの境界を越える」とはどういうことなのか?』と入れたのですね。それで、時間があれば、どうしたら越えられるのかまで議論できるのだけれども、そこまでは求めませんと。どこまで書くか、すごい悩んだところがあって。

『私たちは変わっただろうか?』というのは、一見よきそうなんだけど、変わるものが善になっているので、この聞き方は、突き詰めると危ない。

そういう意味では、「気づいたっらうか」とか、「どういうことを感じたっらうか」というのはありうるのだけれど、それだとあまりグループワークにならないかもしれない。

—— ほわっとした感じですよ。

—— 発表して終わってしまう可能性がありますよね。

—— 「原子カムラに対する認識は変わっただろうか？」はどうですか。第 1 回で議論しましたよね、そのときに皆さんが抱いていた原子カムラに対する認識は変わりましたか。

(木村) 「認識」というと、何が認識ですかという話に堂々巡りする気がしてならないのですよね。そういうところは適当にスルーした話し合いをしたいところはあつて。

(土田) 最終的に、シンポジウムで我々のセッションは全部終わるわけですよね。そうすると、やはり第 5 回の話し合いをシンポジウムにもつなげたいですよね。我々は原子カムラの境界を越えるにはどうしたらいいか、というテーマで研究しているわけだから、シンポジウムもそこから離れるわけにはいかないですよね。

—— 変わったかどうか直接聞かないで、第 1 回と同じテーマで議論したらどうですか。

(土田) あ、私はそれは賛成です。

—— そうすると、変わったか、変わらないかは、まとめを見れば一目瞭然。変わったかと聞くと失礼だから、最初と同じ質問をする。

(土田) それを聞けば、境界はあつたのかということも含まれるし。それから、越えられるかということも含まれるし。

(木村) 第 1 回のテーマじゃ変化が出てこないと思うのですよね。

—— 私も変化が出ない気がします。第 1 回は、変化が出るほど議論していないですよ。

—— 掘り下げていないから。

—— 私たちはワークショップとかいろいろ見てきているから、全然掘り下げられていないとか、話が深められなかったと思うのですが、アンケートを見ると、一般参加者の方からは、いろいろな人の意見がいっぱい聞けて、話が深められて良かったという感想もあるのですよね。

—— 不思議ですよね。市民の人はそう思っている。拡散する中で議論が深まることにと

でも満足感があったと書いてあるのですよね。

でも、学会員の方にはそういうご意見はないですね。こういうことが分かったとか、こういうのがたくさん出たとか、客観的なお話ですね。だから、議論にはなっていないと思うのですよ。

(土田) ある意味、冷めているのですよ。学会員は、意地でも想定内だと思いたい方がいるような気がします。

—— 最近、リスクコミュニケーションに関するいろいろな方の意見が、事故のせいで表明されているのですけれども、あるリスクコミュニケーションの専門家の分析によると、これまでのリスクコミュニケーションは、知識充足型コミュニケーションが主体だったと。要するに、市民は知識が空っぽだから、知識さえ充足すれば市民の不安は払拭できるのだと。これが知識充足型のコミュニケーション。

こう思い込んでいたけど、全然違うと。充足すればするほど、前に土田先生もそういうことをおっしゃられましたけれども、ますます不安になる要素もあるわけです。

フォーラムに参加している専門家の中には、やはり知識充足型コミュニケーションがベストだと思って参加してこられた方はたくさんいるわけです。だから意見が鬱積しているのですよ。

ところが、一般市民の回答は全然違うのですよね。知識充足が不安解消ではない。コミュニケーションをして、専門家の考え方が一般市民とそんなに違わない、人間として会話ができる、話が通じる人だ、ということが分かるだけで、信頼感が増しているわけですね。

だから、まさに知識充足が信頼感につながるのではなくて、コミュニケーションを重ねることが非常に重要な不安解消なんだということが読み取れる。私はそういうふうに取り扱ったのですが。知識充足型の感性というか、間違えが、このフォーラムを通じて、非常によく分かったという感じがしているのですけどね。それがアンケートの結果に非常によく現れているような気がする。

だから第4回で、学会側の人は一生涯懸命知識充足しようと思って、張り切ってくると思いますよ。

(木村) でも、そこは時間管理で、ちゃんと他の人からも意見が出てくるとことを知ってほしいなど。

すいません、例えば、「原子カムラはあるのか、ないのか？ 原子カムラというものをどうしたらいいか？」という、少しぼやかした感じにする。

「原子カムラをどうしたらいいか」にすると、原子カムラがないと言ったときに何もできないので、「原子カムラというものをどうしたらいいか」と言っておけば、それはイメー

ジの問題でしかないのだから、そのイメージを払拭するようなことをやればいいっていう人もいるかもしれないし。やはり厳然とそれはあるんだ、でも、それをどうやって崩していったらいいのか、という話ができるかもしれないし。もしくは、別に何もしなくてもいいという人が出てくるかもしれないし。

こういうフォーラムをやってみたけど、どうだった、っていう話を、うーん、そこを交えるかどうかですよ。

(土田) 最後のところですよ。例えば、原子カムラの問題にこのフォーラムは役立ったかとか。

—— それはインタビューで聞いたほうがいいのではないですか。

(土田) いや、そうなのですけど。

(木村) アンケート、もしくは、そこまでくると、もうインタビューのほうがいいかもしれませんね。

インタビューはもう個別なので、その人が持っている原子カムラ像が、フォーラムを通じてどう変わっていったかという議論とか。それを越えるためにあなたはできますかという個人アクションも聞けますし。その後にインタビューを入れているというのはそういう意味で、すごく使いそうなのですね。

だけど、グループワークの話の中で、どうですかって聞いてしまうと、皆の前での表明で終わっちゃうし、グループワークにならないような気がして。

—— 私が先ほど話したようなこと（知識充足型ではダメということ）を、私の理想から言えば、参加者全員がそういう認識を共有してくれると大変素晴らしいと思うのだけど。

(木村) 特に専門家がですね。

—— コミュニケーションが一番大事なんだと。知識充足型では問題解決できないと。

—— そうです。知識を教えてあげれば信頼が戻るというのは幻想だよということに気づいてくれると、非常に意義がある。

(土田) (知識充足型は) 時代遅れってことになっているのですけどね。

(木村) そう、もう時代遅れなのですけど。

脱線しちゃいますけど、福島でいろいろコミュニケーションの研究をしている方が、「でも、結局必要なのは知識の投入と教育ではないか、という意見からは離れられていないんです」って、この前私にカミングアウトしてくれていました。

(土田) 少し別の観点で言いますね。世論研究というのがあるのですが、世論というのは、1人1人の意見の集合ではないのですよ。世論というのは、他の人がどう考えているか、という認識の集合なのです。そこから行くと、やはり私は、自分がどう思っているかということも大事なわけけれども、それと同じように、他の人たちがどう考えていると思いますか、という議論がいるのではないかという気がします。

(木村) 最後にするには、まとまりがない気がします。

(土田) まあ、そうなのですけど。

(木村) 「原子カムラはあるのか、ないのか？ 原子カムラというものをどうしたら良いか？」ではだめですか？

(土田) いや、最後だから、いいのではないのでしょうか。大上段のテーマになるしかないと思います。

—— 最初に、「もう一度考えよう」をつけたらいかがですか。

—— 「もう一度考えよう、原子カムラはあるのか、ないのか？」ですか。

(土田) そうですね。「もう一度考えよう」というフレーズを入れると、結構話し合ってもらえそうな気がします。

—— というか、今までそれを考えてきたんだ、ということを確認させるみたいな。

(木村) では、そういう方向で。

やはり、「私たちは変わっただろうか」とか、「越える」というのも少しベクトルが入ってしまっているのだなというのは、ここに来て思っているところもあるので。そういう意味では、「どうしたらいいだろうか」という少しフラットなテーマにしましょうか。どうもしなくていい、というのも含めて。そこを書くと、自己否定みたいになっちゃうから書かないですけど。

では、「もう一度考えよう、原子カムラはあるのか、ないのか？ 原子カムラというもの

をどうしたら良いか？」くらいのシンプルなテーマにしましょうか。漠然としているってまた言われそうですけど。

—— 初心に戻って。

—— このテーマを仕切ろうと思うと、本当にある程度力のある人がファシリテーターに当たらないと、迷走する可能性もありますよね。うまく当たれば、結構いけるかなと思うんですけど。

(木村) でも、私としては、迷走してもらっていいかなと思っていて。ここでのまとめは迷走してしまっても構わないのだけど、個人個人の中で何か気づきとか変革が出てくれば、それは成功だと思うのです。それは、インタビューまで含めると、何か生まれている可能性がある。

ここできれいにまとまっていたとしても、逆に個人個人の中では全然変革がなければ、成功でなかった可能性もあって。その辺はまた、インタビューが終わった後に共有すると、いろいろ面白い議論ができるのかもしれないですよね。

—— 私は、やはり難しいテーマだから、5回程度で、「こうだった」と断定するのはできないと思うのです。

そういう意味でも、基本に戻って、もう1回考えましょうというのはいいいと思います。

—— あるスパンの間の変化率を観察しただけで、これで全体を押し量ろうというのはやはり危険ですね。

(木村) 危険ですね。

(土田) このフォーラムは合意形成じゃないですから。

—— このときに、「原子カムラ」といっても、また「原子力発電」の話を延々とする人が出てくると思うのです。それはどうしたらいいですか？ もうファシリテーターに任せればいいのでしょうか。

(木村) うーん、それがなるべく抑えられるように、第4回で吐き出してもらおうというのが目的でもあるんですけどね。それに対して延々と言ってみた結果として、結局それは共有されるものではないということが少しでも分かれば、そこで1回吐き出してしまえば、少しは話せるようになってくれないかなという期待が一応あります。

でも、(第5回で)無理だったとしても、そこをまた介入すると、最後の最後に介入って言われてしまうので、良くないと思うので、ここはぐっとこらえてほしいと思っています。

ただ、そうすると、そのグループにいた人たちがかわいそうなのですよ。

—— そうですよ。グループが気の毒ですよ。

(土田) 「もう一度考えよう」なのだから、前に言っているはずなのです。まだ言い足りないことがあるという人は、たぶんいないと思います。

—— いや、いますよ。

(土田) いや、つまり、同じことを繰り返して話したいと思う人はいるかもしれないけど、前回言わなかったことで、まだ大事なことがあるんだって言い出す人はいるのかなと思って。いるのかな、やはり。

—— いるでしょう。

—— 同じことを何回でも言いたい人は、言うのですから。

—— 充足型を目指している人にとってみたら、今までに話したことなんて、自分の言いたいことの1%にも満たない。

—— それは市民の側もそうですよ。原子力発電に関してものを言いたい人が来ているのだから、延々とそのことしか言わないわけです。

—— 前にも言いましたけど、ずっと不安でいたい人なのです。インターネットとか本を読んで、調べてきたんですけどいいながら、不安のタネをいっぱい仕込んでくるのですよ。

—— だから、ファシリテーターが大事ですよ。「いや、そうじゃなくて、原子カムラについて話しましょうよ」と言ってくれるような人が当たればいいけど。

(木村) 最後に限っては、ファシリテーターをグループの中で決めてもらうのはどうでしょう。くじではなくて。グループ分けはくじだけど、ファシリテーターはグループの中で最初に決めてください。立候補でも、推薦でも構いませんという形にする。

(土田) それがいいですね。

—— すみません、「原子カムラというものをどうしたら良いか？」のところは、ほわっと意見でもいいし、例えば専門家から具体的な話が出てきてもいいということですか？

—— できればそうなったほうがいいけど、それを誘導するのはいけないから、と思って、そういう話になっているのでしょう。

—— いえ、誘導はしないのですけれども、ほわっとしたテーマのときは、皆さん何を書いたらいいか分からないので、質問されるのですよ。だから、「何でもいい」という回答でいいわけですよ？

(木村) まあ、中身についてはまた次回詳しくやりましょう。とりあえずテーマだけ決めないと、第4回で話せないのです。今話されているような細かいところに関しては、次の研究会で深めたいと思います。まだあと1つ議題があるのに、もう時間が過ぎているので。

では、中途半端で悪いですけど、少なくともテーマと、懇親会の話と、外部評価者の話は終わりましたので。それ以降の詳しい話はまた次回やります。

4. フォーラム終了時のアンケート等について

(木村) では、最後の議題です。土田先生、少し説明をいただいてもいいですか。

(土田) フォーラム終了後に行う最後のアンケートです。表紙は事前アンケートとほぼ同じでいこうと思います。記名です。ただ、いつもと同じで、基本的には私しか見ないということになります。

見ていただければ分かると思いますが、1月にやって、事前にやってもらったものとほとんど同じです。ただ、1ヶ所だけ、「規制委員会についての意見」は抜きました。その他はほとんど同じです。意見が変わったのか、変わらないのかということ聞いていきます。これが9ページまでです。

10ページからが、フォーラムについてお伺いしますということです。Q19から読みあげていきますね。

Q19. あなたはこのフォーラムに参加したことによって原子力に携わっている人・組織についての印象が変わりましたか。3択です。変わらない、よい印象を持つようになった、悪い印象を持つようになった。

Q20. 原子力に携わっている人・組織についての理解が深まりましたか。これは4択です。

深まった。どちらかといえば深まった。どちらかといえば深まらなかった。深まらなかった。これは、首都圏参加者にとっては普通に答えられますが、専門家の方に関しても、自分たちを知るといって答えてもらおうと思います。それがこのままだと専門家に伝わらないというのであれば、言葉を補おうと思っています。

あ、Q20が2つありますね。2番目のQ20ですけれども、「原子カムラ」とは何だと思えますか、という話です。ここの選択肢は第1回のフォーラムの記録から拾いました。削ることもできるし、足りないところがあるかもしれません。ここは大事なので、皆さんからご意見ください。

1. 原子力業界。2. 原子力関係の仕事をしている人たち。3. 原子力の専門家。4. 原子力への差別用語。5. 電力会社。6. 原子力の産・官・学連合。7. マスコミがつけた言葉。8. 原子力立地で生活している人たち。9. 原子力立地の行政。10. 東大・京大の原子力学科出身者。11. 原子力発電を推進している人たち。12. 原子力で甘い汁を吸っている人たち。13. 原子力を報道するマスコミ。14. 原子力の政治家。15. 自然エネルギーに反対する人たち。16. 税金に守られた特権組織。17. 原子力を信奉している集団。18. 原子力の組織に縛られている人たち。19. 反原発の意思表示。20. 原子力関係者の家族。21. 原子力を不安に思わない人たち。22. 原子力の科学信奉者。

いらぬものはありますか。

(木村) 個人的に言うと、「東大・京大の原子力出身者」は、別にそんなに限定しなくてもいいかなと思うのですけど。

(土田) では、これは取りましょう。

—— 17と22は、読む人によってニュアンスが変わりますよね。私の中では同じなのですが。これを見て、17と22は違うものだと思う方がいらっしゃったら、どちらも残したほうがいいと思うのですけど。

—— 違うのではないですか。

(土田) つまり、原子力を科学だと思っていると同じなのですよ。ところが、原子力を科学とっていない人たちもいる。

—— なるほど。では、両方残したほうがいいですね。すみません。

—— 7と13は似ていませんか。

—— これは明確に違いますよ。

(土田) ええ。むしろ、4と7が似ている、ということも出てきます。

(木村) 7は「言葉」ですけども、13は「マスコミ」がムラに含まれているという意見です。

19はどういう意味でしたっけ？

(土田) 「差別用語」みたいなものです。反原発の意思表示をするための用語であると。「の用語」とつけたほうがいいですね。

先ほどみたいな誤解があるとすれば、13も「マスコミの人たち」とつけてもいいですね。

(木村) 10はどうですか。いらないですよ。

(土田) そうしたら、取りましょう。

—— 20も、こういう言葉が出ていたのですか？

(木村) これは、家族も含まれるのですか？ という意見です。

—— 仕事とプライベートの区別がどこかで線が引けるのか、引けないのではというお話をなさいましたよね。

すみません、「8. 原子力立地で生活している人たち」というのは、

(土田) 地元の人たちです。

—— 直接原子力発電所で働いている人ではなくて、その恩恵で生活も成り立っている人たちですか？

—— 原子力発電所のある地域の人たち、という意味です。

—— 「立地地域」にしたほうが。

(土田) 「立地地域の人たち」のほうが分かりやすいですね。

—— これは原子力発電なのですか？ 廃棄物処理とかは考えていないのですか？

—— あのとこの意見は、原子力発電所という意味だったと思います。

—— 地域住民ですね。

—— でも、地域住民まではいかないのですよ。地域住民でも、学校の先生や銀行員は違うわけで。この関連で働いている人たちです。

(木村) いえ、そうじゃない人もいます。

—— そうじゃないでしょう？

—— いや、このグループで出たキーワードはそういう意味で出たのですよ。

(土田) 「原子力発電所の近くに住んでいる人たち」っていうのが、アンケートではよく使う言葉なのですが、それでは駄目ですか？

(木村) それはちょっと違います。本当は「自治体」という意味ですよ。それもある。三法交付金とかが落ちているので、そこに住んでいる人たちも同罪だみたいな、そんなイメージ。

(土田) そうですね。では、やはり立地地域という言葉。

(木村) そのほうが私はいいかかと。

(土田) まあ、フォーラム参加者対象ですから、かたい言葉でも構わないので。

—— 「原子力関係の仕事をしている人たち」は、反原子力の仕事をしている人も含むのですか？

(土田) 受け手次第ですね。普通は入らないでしょうけど。

—— 個人的には、反原子力の人も、まさに原子カムラの住人だと思っています。原子力がなかったら、あの人たちは商売が成り立たないわけですから。

—— そうですね、反対することで商売が成り立つんですね。

すみません、「原子力立地で生活している人たち」に戻りますけど、どういう意味で発言されていたのか、もう一度言ってください。

—— 原子力発電所のある地域で、それに関連する仕事をしている人たち。

(土田) 広いんですよ。宿屋さんも入ってくるので。

(木村) あとは、東海村とか、そういうところですよ、という話をしている人もいたので。別の班だったかもしれませんが。

だから、そこは分ける必要があるかもしれませんが。本当に立地の自治体ですって言っている人もいれば、そうではなくて、そこで何らかの関係を持って生活をしている人たちと言っている人もいます。

(土田) 2つに分けますか？

—— 「9. 立地の行政」は、そういう意味ではないのですか？

(木村) 行政は、職員という意味です。市役所の人。「自治体」ではないです。

—— 「行政」というと、組織ではなくて、行政を行うとか、そういうふうを感じるのですけど。

(土田) では、「行政の人たち」にしますか。

—— そうしたら、自治体とはまた別になるのですか？

(木村) 「なんとか村」が原子カムラだとか、そういうふうに使っているときもあるので。そこに立っている自治体という意味で、原子カムラと呼んでいるという意識もないこともない。

(土田) では、10番はそれにしますか。「原子力立地の自治体」。

—— 市町村のほうが分かりやすいです。

—— 市町村と行政と分ける意味はないと思うけど？

(木村) 「市町村」はその区画であって、「行政」といっているのは「行政の人たち」。それは別なので。

—— 行政の人たちと、市町村って、

(土田) あのですね、これは賛成している人、反対している人って区別をつけていないのですよ。行政の人たちだって、反対にいく人もいるだろうし。それから14番の「原子力の政治家」だって、反対の政治家もいれば、賛成の政治家もいるのです。暗黙には賛成している人たちという前提で言われているとは思うのですけれども。

—— 受け取りは各自自由なわけですね。

(土田) はい。そうです。

(木村) 自治体、市町村と言ったときは、ムラという言葉で、人の集まりではなくて、行政区画として捉えて答えている人たちが一部いる、ということです。

—— 「14. 原子力の政治家」は、賛成している政治家ではないのですか？

(土田) 賛成のつもりで書いているのですが、それを明確化したほうがいいですか？「原子力を推進する政治家」とか。

—— 反対している政治家を原子力ムラというのかな？

—— 原子力によって利権を得ている人の中に入らないこともない。原子力反対と言うことで自分の票を確保したり。何らかの仕事をそこから得ている。

(木村) あの、すみません、時間もあるので、提案ですが、今日全部を議論するわけにはいかないなので、今日は全体の概要を土田先生に話していただいて、どこに注目して意見をいただきたいかを言ってもらって、

(土田) では、次回の研究会で時間をちょっともらえれば、今日は概要だけ説明して。

(木村) そのほうがいいと思います。とりあえず各自持ち帰ってもらって、中身を見て、ちょっとこの文言の意味が分からないとか、そういうところはチェックをして、次回持ってきてもらったほうがいいかなと思います。

(土田) では 11 ページに移ります。Q21. 「原子カムラ」に悪い点があるとすれば、どのようなことだと思いますか。これも記録から拾って、めぼしいところを挙げました。

良い点があるとすればという質問も考えたのですが、まあ、無駄だなと思って、良い点は省きました。

Q22. 原子カムラと一般の人々との境界を越えることができると思いますか。これはもう第 4 回、第 5 回で話し合ってもらった内容に関わってくるのですけれども。越えることができる。どちらかといえばできる。どちらかといえばできない。できない。4 択で答えてもらおうと思います。

Q23 は、Q22 でできると答えた人のみに聞いて、どうすれば越えられると思いますかというのを自由回答で書いてもらう。

Q24 は、できないと言った人だけに聞いて、なぜですかというのを答えてもらう。

12 ページです。Q25 は、フォーラムに参加していない一般の市民に対する印象を聞こうと思います。なぜかという、参加者のお互いの印象を聞いてもあまりアンケートとしてはよろしくない、それはインタビューで確認してもらえばいい。フォーラムに参加したことによって、フォーラムに参加していない一般の市民に対する印象が変わりましたか。よい印象を持つようになった。どちらかといえばよい印象を持つようになった。変わらない。どちらかといえば悪い印象を持つようになった。悪い印象を持つようになった。という形で確認しようと思っています。

Q26、同じことを原子力専門家に対して聞いています。このフォーラムに参加していない原子力専門家に対する印象が変わりましたか。

Q27. このフォーラムに参加したことによって、フォーラムに参加していない一般の市民に対する理解が深まりましたか。深まった。どちらかといえば深まった。どちらかといえば深まらなかった。深まらなかった。4 択です。

同じことを専門家にもやって、Q28. フォーラムに参加していない原子力専門家に対する理解が深まりましたか。

Q29. このフォーラムは有意義でしたか、ということを一応確認のためつけておこうという事です。

最後は自由回答なのですが、フォーラムの良かった点があれば挙げてください。改善すべき点があれば挙げてくださいという形です。

—— Q30 は、良かった点、あるいは気がついたことがあれば挙げてくださいますかと書いたらどうですか？

(土田) Q30、31 を一緒にしますか？ 良かった点や改善すべき点、気がついた点を挙げてください、にして。

これを分けると、それが良いことだったと評価しているか、あまりよくないことだと評価しているかということが明確にはなるのですけれども。例えば、「進行が遅かった」ということが、ひょっとするとそれで良かったと思っている人もいるかもしれないし。

—— 私は、時間が足りないというのはいいことだと思っているのだけど。

(土田) ですから、時間が足りなかったというところが、どちらに挙がってくるかをちょっと見たい。

(木村) 時間が足りないのがいいことか…。

(土田) いや、時間が足りないくらい議論ができたよ。

—— 私もそう思いますね。

(土田) 確かにトリッキーだし、今おっしゃったように質問としては不自然なところが残るのだけれども、やれるものならやってみようかと。

—— 良かった点、改善すべき点というところ、プログラムとか進行のことだけになるけど、そうではなくて、自分の内なる部分で、このアンケートに書ききれなかったような気がついたこと、というのを入れておいたほうがいいかなと思ったので。

(土田) それは最後のページです。あなたからのメッセージ。

—— 分かりました。なら、いいです。

—— **Q25～28** なのですけども、例えば **Q28**、原子力専門家に対する理解が深まったというのは、原子力学会の人に対しても、原子力専門家に対する理解が深まりましたか、と聞くのですか？

(土田) はい。自分以外の専門家があと 9 人いたわけですから。例えば、放射線の専門家という人がいたけど、ああ、そうなのか、というような理解が深まることは期待するのですけど。

—— だけど、フォーラムに参加していない専門家に対する、とありますよね。

(土田) だから、そこから類推してもらおう。

—— ああ、なるほど。

—— こんなふうには思っていたけど、実はそうではなくて、こういう面もあったということに気がついたことによって、見方が変わった、ということですね。

(土田) そうです。自分の会社関係の人たちばかり見ていたけれども、原子力関係にはこんな人たちもいたのかということで、世の中にはこういう原子力関係者もいるんだな、という理解が深まったかと。

でも、説明しなければいけないということは、やはり言葉をもうちょっと、

—— いえ、分かりますよ。

—— ちょっと気になるんです。Q27 も、フォーラムに参加していない一般の市民に対して、フォーラムに参加している市民が、

(土田) そうです。例えば、「市民なら原子力に反対するのが当たり前」と思っていたんだけど、どうも一般の市民の中にはそうでない人もいるらしい、と思ったら、そういうことを答える。

どうでしょうか、「フォーラムに参加していない」とわざわざつける必要はないですか？ただ、特定の人を想像して答えてもらうのはちょっと嫌だったのですね。

—— うーん。私は、なくてもいいような感じがします。

(木村) 例えば、「このフォーラムに参加したことによって、一般市民に対する一般的な印象が変わりましたか」はどうですか。

(土田) ああ、それでいいですね。

(木村) 印象に「一般的」をつければ、ああ、市民一般ね、という感じで読めるかなと思ったのですが。

(土田) 一般的な印象。あるいは、一般的な理解。

(木村) そういう感じで。専門家のほうも、それだと答えやすいかなと思って。

(土田) では、そうします。

—— 「印象」と「理解」、言葉は違うけど、チェックをつけるときに悩むなという感じはします。

(土田) 印象を聞けば理解はいらないかなという気も確かにします。ただ、心理学の興味関心からなのですけど、「印象」というのは、何も考えなくてもつけられるのですよ。でも、ちゃんと知識を持ってよく考えているかどうかを、ちょっと「理解」という言葉に期待している。

(木村) Q25、26は5択ですけど、Q27、28は4択にしているのは、何か理由があるのですか？

(土田) 「理解」が「変わらない」というのは不自然かなと思っただけです。「どちらでもない」とかを入れれば、5択にはできます。

—— 同じような形式にしておいたほうが後で評価がしやすいとか、そういうことはないのですか？

(土田) 4択のほうは0から無限大にいくのですが、5択のほうは0が真ん中であって両側に無限大で行っているのです。

—— このアンケートは、最後に渡されるから、答える人から見ると、このフォーラムはそういう意図で行なわれたんだなということになるので、重要ですね。

(木村) Q19、20は、この聞き方だと、後ろ(Q26、28)とあまり変わらない気がします。

(土田) 変わらないですね。では、19、20はいらないですね。

それから、念のため申し上げますが、これは記名なので、性・年齢とかは一切省いています。

—— Q21ですが、「原子カムラに悪い点があるとすれば」って、悪いと決めつけて書いて構わないのですか。悪い点ではなくて、壁とか境界のことを言っているのではないかと思うので。「原子カムラに壁や境界があるとすれば」、そういう聞き方じゃできないですか？

—— でも、「安全に鈍感なこと」「エリート意識を持っていること」「利益に目がくらんでいること」などは悪いことのように思えるのですけど。

(土田) もうひとつ質問を起こしましょうか。原子カムラに境界があると思いますか、という形で。

—— 原子カムラと市民の間に境界があると思いますか。

(木村) その境界は何でしょうか、みたいな感じですね。

(土田) そうですね。では、もうひとつ質問を起こします。

—— Q21の選択肢は、今までフォーラムの中で登場していたフレーズなのでしょうか？

(土田) そうです。記録に残っています。

(木村) あと、9ページ、Q17は少なくともいらなかなと思います。

(土田) すみません、うっかりしていました。ええと、Q16はいらなですね。

(木村) Q17も。Q18はあってもいいかなとも思ったのですが。

(土田) いや、Q17、18は、最初を取っていますので、変化が見たい。

(木村) Q17はいらないのではないですか？

(土田) Q17、ここでは1月調査の体裁になっていますが、応募用紙の形に変えたいと思います。

(木村) Q17って変わりますかね？ 変わるとしたら、応募してからこの半年で、今はやっていますって変わるということですか？

(土田) そういうことですね。

これは4回目なのですよ。1月に答えて、応募用紙で答えて、事前で答えて、4回目です。これは、省くことはないだろうと思います。

(木村) あと、これはもうアンケートなので仕方がないかなとも思いますが、3 ページの内容は、いつも終了直後のアンケートで書いてもらっていますよね。それも重ねて聞きますか？

(土田) 重ねて聞きます。

(木村) そういうことですね。重ねて聞くのだったら、あってもいいかなと思ったのですけど。

(土田) 各回の変化は、第 5 回終了後のアンケートで見て。

(木村) では、こちらはそれとは別に、また改めて、フォーラム参加前と参加後で比べると。

(土田) ええ。

それに意味を持たせるためにも、これはフォーラムが終わった後、会場で書いてはダメですね。うちに帰って、書いてくださいと。会場から離れて、変わるかもしれない。自分の家庭に入って、家族と一緒にになったら、またちょっと考えが変わるというのはありうるのです。

—— では、懇親会はフォーラム終了後すぐにやってもいいと。

(土田) それでいいです。

(木村) では、それですっきりしたので、そういう方向でいいですね。

—— フォーラムでコミュニケーション・マニュアルの説明で時間を取ったのですが、それについての効果とかは聞かなくていいですか？

(土田) よろしいですか？

(木村) それはインタビューで聞けばいいです。
そろそろ 17 時になるので、終わりにしたいのですが、

—— すみません、ひとつだけ確認なのですけれども、例えば 3 ページは 1 から 5 までの

スケールで聞いていますよね。同じように聞けるところは同じシステムにしたほうが、集計のときに楽とか、そういうことはないのですか？ とにかく 5 択にしておくとか、真ん中をどちらともいえないにしておくとか、それだけそろえておくと、後で集計や分析が楽かなと思ったのですが。

(土田) まあ、これでいけると思います。

(木村) では、そろそろ終わりにしてしましますが、これは 7 月 12 日の第 5 回研究会で再度ディスカッションしたいと思います。そのときまでに、各自で気づいたところがあればメモしてきていただいて、そのときにまた時間をとってやらせていただければと思います。

(土田) まだ少し時間がありますので、まったく関係ない質問、こんなのはどうでしょうというのも大歓迎です。

—— それも次回にお伝えすればいいですか？

(木村) 次回でもいいですし、メールで送っても大丈夫です。

—— 元気ネットとしては、サブファシリテーターをやらせていただいたので、提案できることとしたらその部分だと思っているのです。

まだきちんと話し合っていないのですけれども、サブファシリテーターはどうでしたか、なんて聞いても仕方がないので、聞かないことにしようかと思っています。

私たちの今回のファシリテーションは、参加者にどう思われるかではなくて、研究にとっていい成果が出るかということでやったので、参加者の方にファシリテーションどうだったかということ聞いても、ちょっと私たちとしては、結果を受け止めるのはつらいなと思って。

(土田) 私もそう思います。参加者から好評だったということを自慢げに発表する人もいるのですが、くだらないと思います。

5. その他

—— 次回の研究会は13時半からではなくて、13時からですね？

(木村) 13時です。次回は7月12日金曜日、13時から16時ということで、よろしく
お願いします。

それでは、今日は30分オーバーしましたがけれども、これで終わりにしたいと思います。
どうもありがとうございました。

以上